

山梨県笛吹市

北原遺跡(2次)

県営畠地帯総合整備事業寺尾地区支線農道第7号

工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

山梨県峡東農務事務所

笛吹市教育委員会

序

本書は平成 22 年度に実施された笛吹市境川町寺尾地区で実施された北原遺跡の発掘調査報告書です。

北原遺跡では縄文時代中期の集落、弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡が確認されました。この調査によって、甲府盆地南東縁の丘陵裾部に展開する縄文時代中期の集落、弥生時代後半から古墳時代にかけての資料を収集することができたことは、大きな成果であったといえます。

御坂山地北西斜面の丘陵や扇状地には旧石器時代から近世（江戸時代）にかけての遺跡が多く点在しています。笛吹市では、甲斐国千年の都として、岡・銚子塚や竜塚古墳などの前期古墳、姥塚などの後期古墳、甲斐の国府想定地として知られる春日居町国府や御坂町国衙、県下最古の古代寺院である寺本庵寺跡、甲斐国分寺跡や国分尼寺跡などの官営寺院などを広く紹介してきました。

一方で豊富な資料を有する縄文時代中期を中心とした遺跡に関する情報発信についてはやや遅れをとっていた現状があります。今年度は笛吹市内の縄文遺跡に注目した歴史フォーラムの開催、縄文時代に特化した冊子、ガイドマップ類の作成に力を入れてまいりましたが、本遺跡についての報告書の刊行により、この取り組みがより厚みを増してきたのではないかと考えております。

さて、この発掘調査報告書刊行にあたり、ご理解ご協力を賜りました県東農務事務所、山梨県教育委員会、山梨県埋蔵文化財センターはじめ関係諸機関、発掘調査においてご不便をおかけいたしまし地権者各位、寒い中発掘調査に参加いただきました作業員各位に深く感謝申し上げ、この発掘調査報告書の刊行の序文に代えさせていただきます。

平成 23 年 3 月

笛吹市教育委員会

教育長 山田武人

例　　言

- 1、 本書は、山梨県笛吹市境川町寺尾 3040-1 外に所在する北原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、 本調査は、県営畠地帯総合整備事業（担い手支援型）寺尾地区支線道路第7号の農道新設工事に伴うものであり、山梨県東農務事務所からの委託を受け、発掘調査・整理作業・報告書作成を笛吹市教育委員会が行った。
- 3、 発掘調査は、2010(平成22)年11月10日から着手し、2011(平成23)年1月14日まで行った。
- 4、 本報告書の編集及び執筆は、内田裕一が行った。
- 5、 本書が掲載した写真撮影は、遺構を内田裕一、鷹野義朗、遺物を内田裕一が行った。
- 6、 1号住居跡より出土の赤鉄鉱の分析は、山梨県立博物館 善名貴彦氏に委託し、分析結果の報告を頂いた。
- 7、 本報告書に係わる出土品および記録図面・写真などは一括して笛吹市教育委員会に保管してある。
- 8、 発掘調査・報告書作成に際し、下記の方々からご協力、ご教示を頂いた。
記して感謝の意を表したい。

出月洋文 正木季洋 保坂和博 小林健二 塩谷風季 稲垣自由 林部 光 保坂康夫 平野 修
河西 学 柳原功一 畑 大介 田中大輔 小野政文 末木 健 入江俊之 中山誠二 善名貴彦
野崎 進 山梨県立博物館・山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター・財団法人山梨文化
財研究所 (順不同・敬称略)

<調査組織>

調査組織調査事務局	平成22年9月7日～平成24年3月31日
	山田武人（笛吹市教育委員会教育長）
	仲澤和朗（笛吹市教育委員会教育部長）
	小瀬忠秋（笛吹市教育委員会文化財課課長）
	内田裕一（笛吹市教育委員会文化財課調査担当リーダー）
調査担当者	内田裕一（笛吹市教育委員会文化財課調査担当リーダー）
	鷹野義朗（笛吹市教育委員会文化財課）
発掘調査作業員	荒川公子 荒川奈津江 池谷美恵子 石坂恵理 豊田順子 卵月ゆかり 神沢時子 河西文彦 齐藤信一 舞石栄子 斎藤多喜子 板本行臣 鈴木光盛 鈴木幸子 高野眞寿美 口田美智子 田草川文子 竹越妙子 角田万紀 中込 椎 服部順子 長谷川規愛 藤原さつき 藤巻淑子 細田和彦 山宮治恵 山貝美香 三神佳美 丸山津枝子 望月 明 矢崎睦美 矢崎 緑
室内整理作業員	角田万紀 藤巻淑子

凡　　例

- 1、 遺構番号は、原則として発見順に付している。
- 2、 掲載遺構図の縮尺は原則として以下の通りである。
遺構全体図は、挿図ごとに示した。
遺構微細図 住居跡（縄文）1/80、住居跡・溝・堅穴遺構 1/60、土坑 1/30、方形周溝墓 1/80 集石土坑・13号土坑 1/20
- 3、 掲載遺物図・拓本の縮尺は、土器・陶器 1/3、石器 2/3、1/2・土偶・土製品・古錢 1/2
- 4、 遺構断面図脇の数値は、標高を示す。
- 5、 本書で用いるスクリーントーンは以下の通りである。
遺構■■■は焼土■■■は粘土■■■は炭
遺物■■■は須恵器■■■は陶器
- 6、 表内の()内の数値は推定値である。

目 次

序 文

例言・調査組織・凡例

図版目次・挿図目次・表目次

第Ⅰ章 調査の経緯と概要 1

第Ⅱ章 遺跡の位地と環境

第1節 位地と地理的環境 1

第2節 歴史的環境 2

第Ⅲ章 調査の方法と層序 3

第Ⅳ章 確認された遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物

(1)堅穴住居跡 7

(2)土坑 7

(3)第2号堅穴状遺構 8

(4)溝状遺構 8

第2節 弥生時代以降の遺構と遺物

(1)堅穴住居跡 16

(2)方形周溝墓 17

(3)土坑 18

(4)第1号堅穴状遺構 18

(5)溝状遺構 18

(6)遺構外出土土器 19

(7)石器・その他の遺物 19

第V章 苗吹市北原遺跡出土の赤色物質の科学分析について 41

第VI章 確認された遺構と遺物 43

図版目次

図版1 遺跡全景(南西側より)	図版4 1号溝・3号溝
A区全景(北西側より)	5号溝・6号溝
B区全景(西側より)	1号住居跡土坑1出土土器
	1号住居跡出土土器
図版2 1号住居跡	1号住居跡出土土器
1号住居跡赤鉄鉱出土状況	図版5 1号住居跡出土赤鉄鉱
1号住居跡土坑1土器出土状況(上層)	2号住居跡出土土器
2号住居跡	3号住居跡出土土器
3号住居跡	3号住居跡出土土器
4号住居跡	5号住居跡出土土器
5・6号住居跡	5号住居跡出土土器
方形周溝墓(南東側より)	6・7号住居跡出土土器
図版3 方形周溝墓(北側より)	3号土坑出土土器
方形周溝墓高杯出土状況	図版6 方形周溝墓出土土器
1・2・3・4号土坑(A区)	方形周溝墓出土土器
3号土坑(A区)	13号土坑出土土器
12号土坑(集石検出状況)	25号土坑出土土器
13号土坑(土器破片)半裁状況	2号堅穴・4号溝出土土器
25号土坑	石鏃・石匙・石錐・搔器
28号・29号・34号土坑・4号溝	石斧
	多孔石・敲石・碎石
	土偶(右手)・土製円盤
	幼獣車・古鏡

挿図目次

第1図 遺構位置図	2	第15図 方形周溝墓	23
第2図 発掘調査位地と周辺道路分布図	4	第16図 13号土坑・同出土土器	24
第3図 グリッド設定図および調査範囲図	5	第17図 土坑(1)	25
第4図 遺構配置図	6	第18図 土坑(2)・1号堅穴状遺構	26
第5図 5号・6号・7号住居跡	9	第19図 溝状遺構	27
第6図 集石土坑(12号土坑)	10	第20図 1号住居跡出土土器(1)	28
第7図 土坑(縄文時代)	11	第21図 1号住居跡出土土器(2)	29
第8図 2号堅穴・4号および6号溝状遺構(縄文時代)	12	第22図 2号・3号住居跡出土土器	30
第9図 5号住居跡出土土器	13	第23図 方形周溝墓出土土器	31
第10図 6号・7号住居跡出土土器	14	第24図 土坑・1号堅穴・溝状遺構出土土器	32
第11図 土坑・2号堅穴・溝状遺構出土時(縄文時代)	15	第25図 遺構外出土土器	33
第12図 1号住居跡・住居内土坑	20	第26図 出土石器(1)	34
第13図 2号・3号住居跡・同炉跡	21	第27図 出土石器(2)	35
第14図 4号住居跡・同炉跡図版	22	第28図 出土石器(3)・その他の出土遺物	36

表目次

第1表 土坑・ピット一覧表	37	第4表 土器觀察表(3)	40
第2表 土器觀察表(1)	38	第5表 石器觀察表	40
第3表 土器觀察表(2)	39		

第1章 調査の経緯と概要

北原遺跡は、平成10（1988）年に境川村教育委員会によって国・県埋蔵文化財補助事業により発掘調査が行われた。そこでは古墳時代後期の住居跡1棟、そして同時期の遺物が出土したことが報告されている。また調査以前に北原遺跡内の畑から出土した土器等が教育委員会に寄贈されており、弥生時代後期～古墳時代にかけての集落があることは想定されていた。

平成22年5月、山梨県東農務事務所より県営畠地帯総合整備事業（担い手支援型）寺尾地区支線第7号新設工事に伴い施工区内の埋蔵文化財の有無について照会が行われた。笛吹市教育委員会では遺跡地図と照合を行い、施工区全体が周知の埋蔵文化財包蔵地である北原遺跡内に位置している事を確認した。また現地踏破でも縄文時代を中心とする遺物の散布が確認された。そのため国・県の補助金を受け平成22年9月7日から9月14日にかけて試掘調査を実施した。

その結果、時期は不明であったが、土坑や溝状造構を検出し、縄文時代中期後半から古墳時代にかけての遺物が出土した。そこで、山梨県教育委員会学術文化財課と笛吹市教育委員会文化財課で協議をおこない、試掘調査で遺構が確認できなかった範囲を除く約1396m²（調査対象面積1436.41m²）を対象に記録保存を目的として発掘調査を実施することになった。

今回は早急な発掘調査を要することとなり、笛吹市教育委員会文化財課と山梨県東農務事務所、施工業者で協議を行い区間を2つ（A区・B区）に分けて発掘調査を行うことになった。

平成22年11月10日からA区の調査を開始し、11月26日からB区の調査を開始した。

A区は12月10日に調査を終了し、その後施工業者に引き渡した。B区の調査は平成23年1月14日に終了した。

北原遺跡の試掘調査、並びに本発掘調査に関係する文化財保護法の諸手続は以下の通りである。

平成22年9月7日 文化財保護法第99条第1項による発掘調査の報告を山梨県教育委員会に提出（試掘調査）

平成22年9月14日 文化財保護法第100条第2項による埋蔵文化財の発見届を山梨県教育委員会に提出し、笛吹警察署への通知を依頼（試掘調査）

平成22年11月10日 文化財保護法第99条第1項による発掘調査の報告を山梨県教育委員会に提出（本調査）

平成23年1月26日 文化財保護法第100条第2項による埋蔵文化財の発見届を山梨県教育委員会に提出し、笛吹警察署への通知を依頼（本調査）

発掘調査の終了報告を山梨県教育委員会へ提出

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 位置と地理的環境

山梨県笛吹市は、甲府盆地の中央部やや東寄りに位置し、北部の秩父山地に続く山々及び東南部の御坂山塊に連なる丘陵山岳地帯と、笛吹川とその支流に形成された扇状地及び冲積地帯である。

本遺跡のある笛吹市境川町は町の出来になった境川が町のはば中央を流れ、また狐川が町東側を流れ浅川に合流する。

町の南部は甲府盆地南縁に位する曾根丘陵の東端にあたる。曾根丘陵は、甲府盆地と御坂山塊とのあいだにある平坦地で、多くの遺跡が確認されており、境川町にも多くの遺跡が存在する。丘陵部からは半沢川・開門川などの河川が低平地へ流れしており、これらの河川により丘陵は南北に分かれている。

北原遺跡は上守尾地区にある。守尾地区は笛吹市の西端に位置し、甲府市との境にあたる。曾根丘陵上に位地し、南東からは御坂山塊の山裾が延びる。間門川が流れおり、その本流子流により開削され、平坦面が点在している。概ね、その平坦面に多数の遺跡が確認されている。

第2節 歴史的環境

笛吹市は、平成16（2004）年旧東八代郡の5町村と東山梨郡の春日居町が合併して発足した市である。県内有数の遺跡集中域であり、周知されている遺跡や史跡の数は県内で2番目に多い。

境川町内の曾根丘陵上においては、肥沃な土壌上に森林が豊かに生い茂り動植物などの食糧を確保できたため縄文時代中期の集落形成が進み人口集中地帯になったものと考えられる。近年では、平成18年度に前間田地区において縄文時代中期曾利式期の仲原遺跡が確認されている。また、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡と低墳丘古墳が揃って確認されている。古墳は、後期古墳を中心に基基ほどの古墳が知られているが、そのほとんどが藤塙地区から八代町よりの東側の地域に限定され、西よりの寺尾地区ではあまり知られてはいない。

北原遺跡および近隣の馬場遺跡（第2図-5）、前付遺跡（第2図-6）の西側で、間門川を挟んで対峙する丘陵に、上の平遺跡（甲府市）がある。この上の平遺跡を中心とする甲斐風土記の丘公園一帯は、百数十基の方形周溝墓が確認された地域であり、近年東側の境川においても弥生時代後期～古墳時代前期の集落と方形周溝墓が揃って確認されはじめている。曾根丘陵平坦面の先端に、弥生時代後期～古墳時代前期の集落と方形周溝墓が構築されたものと考えられる。



第1図 遺跡位置地図 (S=1:50,000)

北原遺跡は、前述したように曾根丘陵の東端に位地しており、古くから馬場遺跡、前付遺跡と並んで縄文時代、弥生時代後期～古墳時代前期の土器や石器が発見されている。平成10年度の旧境川村教育委員会らによる発掘調査においても古墳時代前期の住居跡1軒が確認されている。出土遺物は18個体のS字状口縁台付甕があり、確認された遺構は少ないが時期を確定できる発掘調査である。今回の調査においても古墳時代前期の遺構が確認されており、曾根丘陵全域の歴史解明のための重要な地域と考えられている。

引用・参考文献

- 境川村教育委員会 2004 『天神遺跡(2次)・立石北遺跡(3次)・北原遺跡』
笛吹市教育委員会 2006 『銚子原遺跡』
笛吹市教育委員会 2011 『仲原遺跡』

第Ⅲ章 調査の方法と層序

今回の発掘調査は、県営畠地帯総合整備事業寺尾地区支線7号の農道新設工事に伴う、約1396m²の全面を対象に実施された。

今回は工事と並行して行わなければならない緊急を要する調査のため、区間を2つ(A区・B区)に分けて調査を行った。開発計画に基づき、試掘により遺構が確認されなかった区間を除き掘削及び調査を行った。重機により表土を除去し、その後人力により遺構確認及び記録作成を行った。

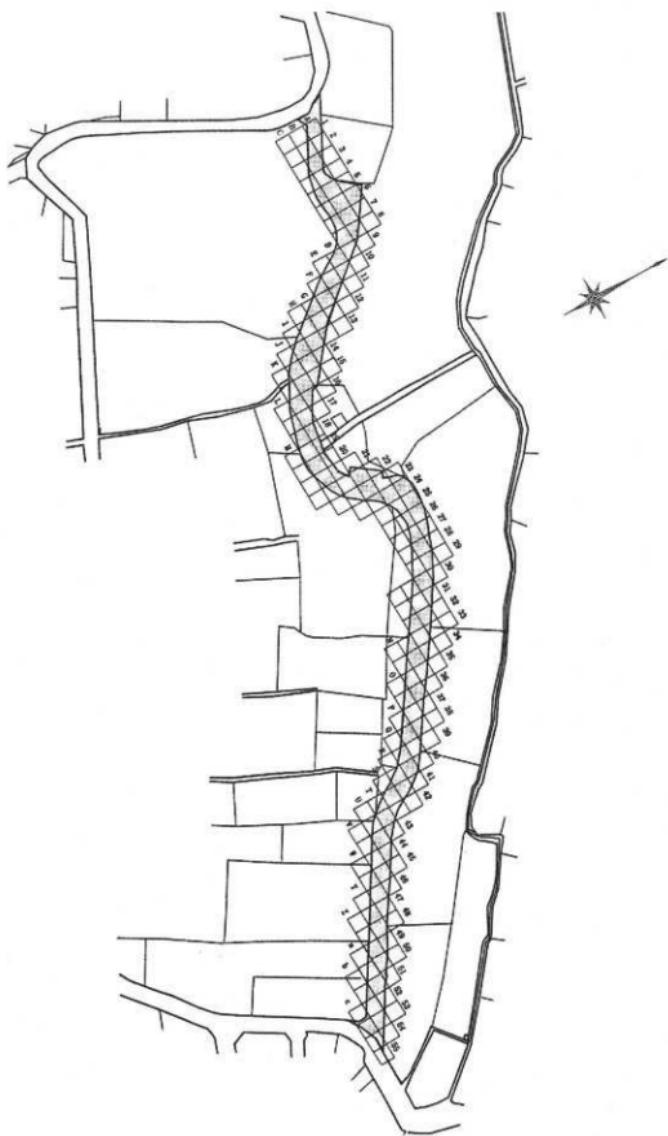
グリットは、磁北に合わせた5m四方のメッシュを調査区全域に設定した。グリットの名称については、南北方向を北から南A～Zのアルファベット、統けてa～cのアルファベットを用い、東西方向は、1～55までの算用数字を用いた。

B区の基本層序は、現地表面から20cmが耕作土、45cmが暗褐色土、以下ローム層の地山であった。

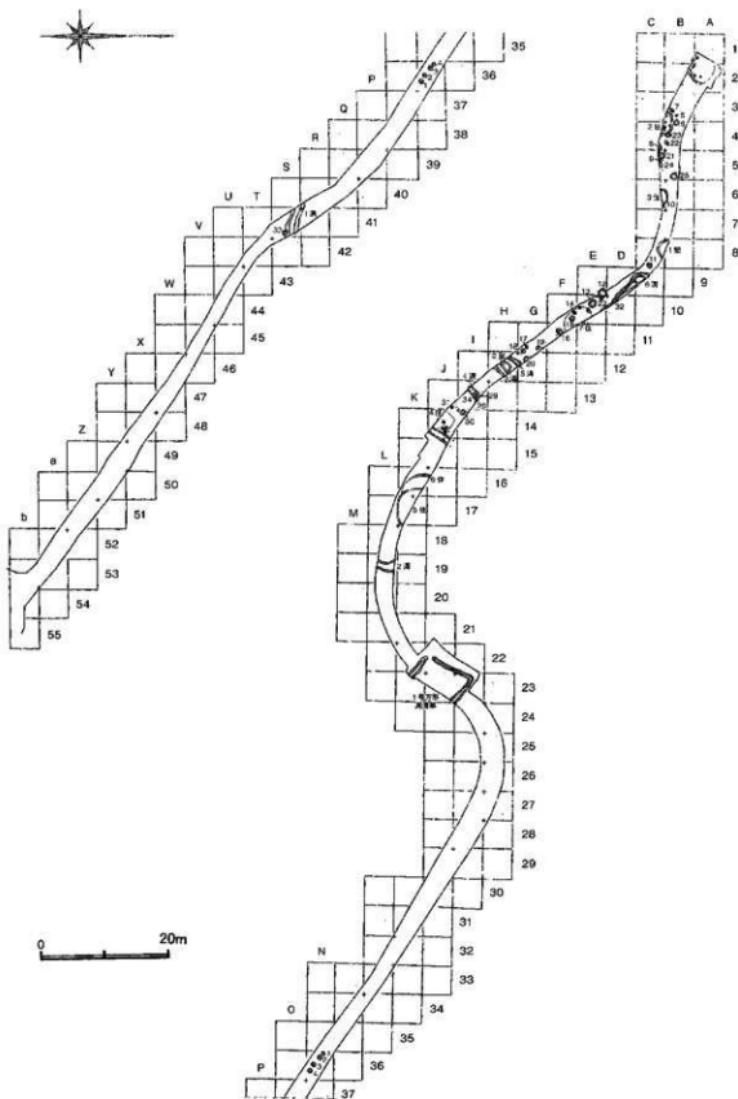


- | | | | |
|-----------|-----------|------------|------------|
| 1. 北原遺跡 | 2. 上原遺跡 | 3. 坂下遺跡 | 4. 白戸遺跡 |
| 5. 馬場遺跡 | 6. 前付遺跡 | 7. 大祥寺遺跡 | 8. 中原遺跡 |
| 9. 藤塹遺跡 | 10. 北切付遺跡 | 11. 水口遺跡 | 12. 辻遺跡 |
| 13. 室屋遺跡 | 14. 蘇在家遺跡 | 15. 諏訪前南遺跡 | 16. 北ノ宮東遺跡 |
| 17. 北ノ宮遺跡 | 18. 諏訪前遺跡 | 19. 天神前遺跡 | 20. 諏訪尻遺跡 |

第2図 発掘調査位置と周辺遺跡分布図 (S=1:10,000)



第3図 グリッド設定図および調査範囲図 (S=1 : 15,000)



第4図 遺構配置図 (S=1 : 500)

第IV 確認された遺構と遺物

第1節 繩文時代

(1) 捨穴住居跡

本遺跡から確認された縄文時代の住居は3軒であるが、いずれも調査当初は住居跡と確認できず土器集中区として遺物取り上げを行った。最終的には完全な形での遺構確認は出来なかつたため、出土した土器の時期、断面図等を考慮した結果3軒の住居を考えた。

◆第5号住居跡【第5図、第9図】

〔位置〕K-16.17グリットに位地する。

〔形状〕楕円形を呈するものと推定されるが、攪乱されており明確には確認出来なかつた。

〔覆土〕暗褐色土を呈する。

〔床・壁〕床は西側に若干傾斜しており、貼り床等の硬化面は確認出来なかつた。現存値の最大壁高は45cmで緩やかに立ち上がる。

〔施設〕確認出来なかつた。

〔遺物〕縄文時代中期井戸尻式の土器が57点、一括で取り上げた物が數十点、曾利式の土器が13点、石器4点が出土している。第9図の6~8は把手の破片である。第9図の24~26は同一個体の可能性がある。

〔時期〕曾利式の土器の出土地点は、後述の6号住居と重複しており、5号住居は縄文時代中期井戸尻式期とした。

◆第6号住居跡【第5図、第10図】

〔位置〕K-16.17グリットに位地する。

〔形状〕5号住居と重複しており、明確な形状は不明だが、楕円形を呈するものと推定される。

〔覆土〕黒褐色土を呈する、若干のロームブロックを含む。

〔床・壁〕床面はほぼ平坦で、貼り床等の硬化面は確認出来なかつた。壁は緩やかに立ち上がるものと推定できる。

〔施設〕確認出来なかつた。

〔遺物〕前述したように、5号住居との重複部分より出土の13点加え、50点ほどの曾利式の土器が出土している。

〔時期〕縄文時代中期後半曾利式期に位置づけられる。

◆第7号住居跡【第5図、第10図】

〔位置〕E-10,F-10,11グリットに位置する。

〔形状〕明確には確認出来なかつた。土器集中区を中心として土坑・ピットの位地等を考慮し推定した結果、楕円形を呈するものとした。

〔施設〕土坑2基、ピット2基を想定内とした。

〔遺物〕曾利式の土器が40点確認されたが、図示できたのは3点のみだった。

〔時期〕縄文時代中期後半曾利式期に位置づけられる。

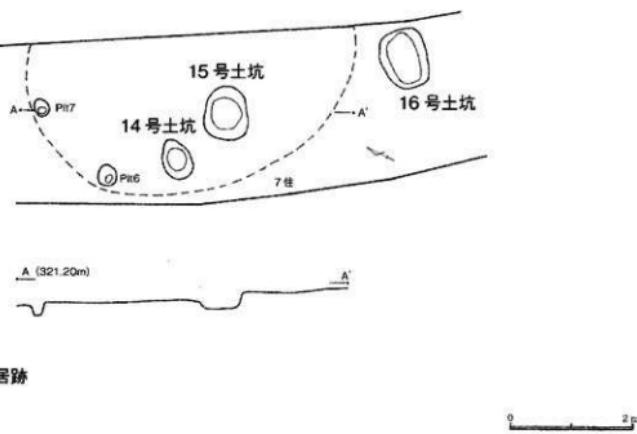
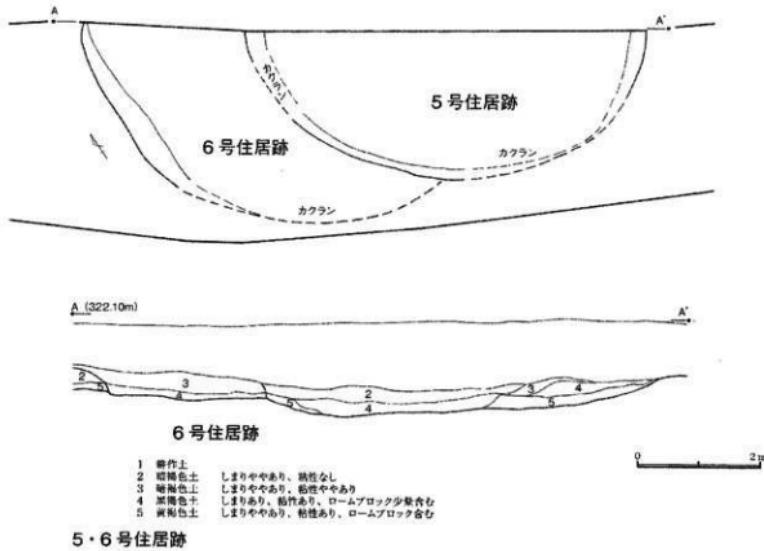
(2) 土坑

本遺構からは、34基の土坑が検出された。そのうち縄文時代の土坑は8基が確認されている。1号土坑からは長さ50cmの石が検出されている。土坑墓の可能性も考えられる。12号土坑は集石土坑である。

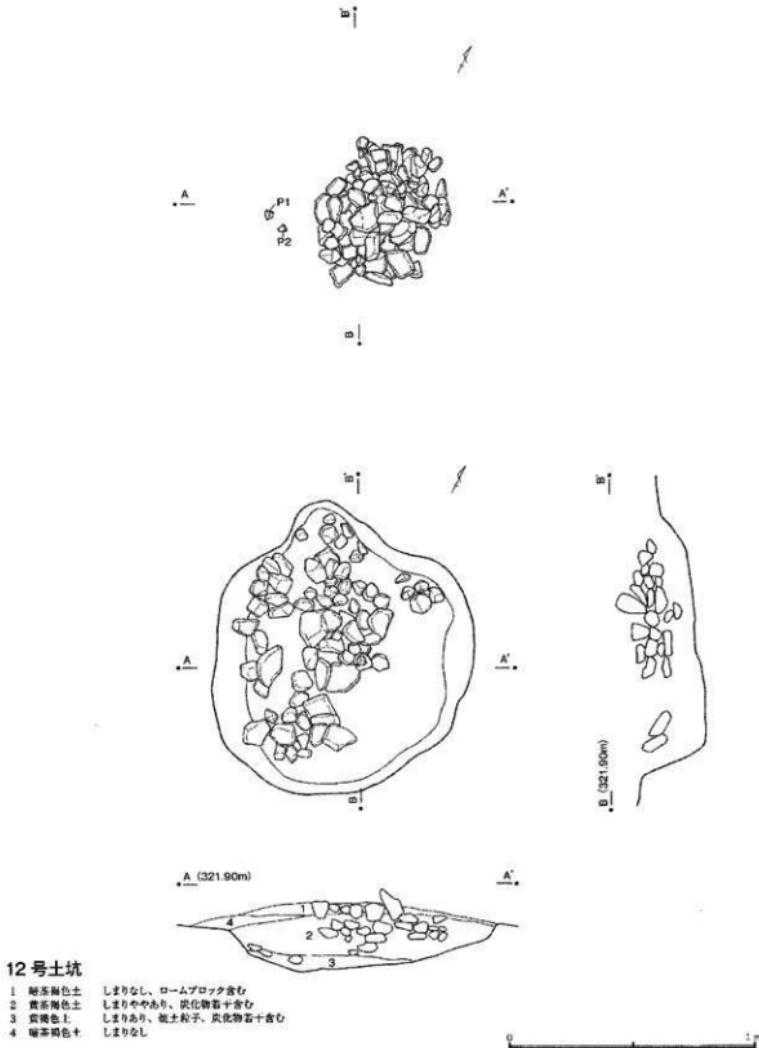
各土坑の規模等の詳細は、【第1表 土坑・ピット一覧】を参照されたい。

◆集石土坑《12土坑》【第6図、第11図】

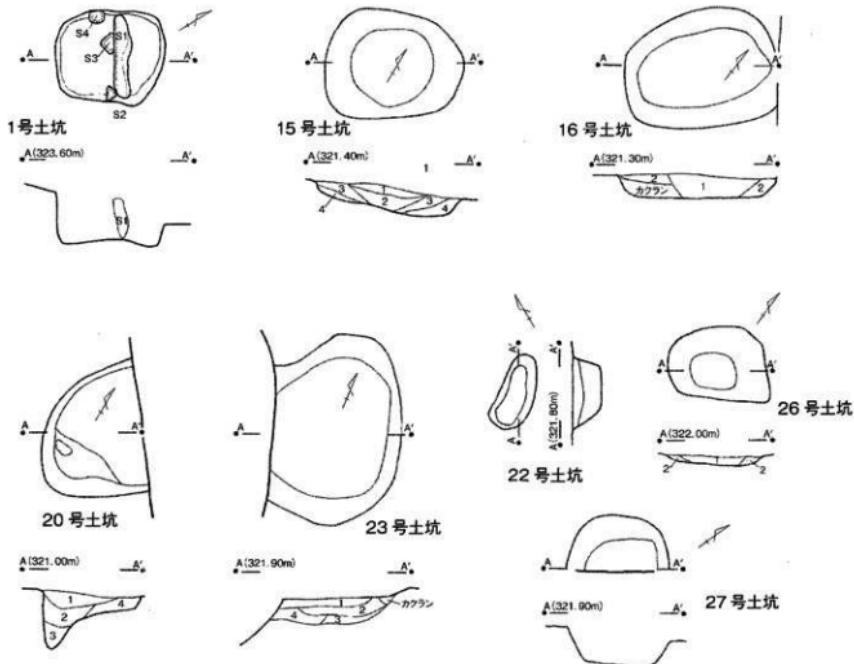
- 〔位 置〕 E-9 グリットに位置する。
- 〔形 状〕 東西に0.8m、南北に1.2mの範囲にわたり、8cm～20cm 大の疊が2～3層に広がる。
若干の焼けた石も確認できた。
- 〔覆 土〕 覆土は、黄褐色土を呈し、少量の焼土粒子・炭化物を含む。
- 〔遺 物〕 縄文時代中期曾利式の土器が出土している。
- 〔時 期〕 縄文時代中期後半に位置づけられる。
- (3) 第2号竪穴状遺構 【第8図、第11図】
- 〔位 置〕 H-12グリットに位置する。
- 〔形 状〕 3号溝状遺構と重複するため、正確な形状は不明だが方形を呈するものと考えられる。
- 〔遺 物〕 曾利式の有孔鋤付土器の破片などの2点のみである。
- 〔特記事項〕 土器については、流れ込んだ可能性を考えると住居跡とは考えにくく、竪穴状遺構とした。
- (4) 溝状遺構
- 本遺構の縄文時代の溝状遺構は2基である。いずれも調査区外に入り込むため、本来の長さ、形状などは不明である。
- ◆第4号溝状遺構 【第8図、第11図】
- 〔位 地〕 I-13グリットに位置する。
- 〔規 模〕 南北に約2.5m、幅1.0m、確認面からの深さは0.45mを計る。蛇行はしておらず、28号土坑、29号土坑、34号土坑と重複している。
- 〔覆 土〕 赤色粒子を含む黒褐色土が主体である。
- 〔遺 物〕 縄文時代中期井戸尻式の深鉢が数点出土しているが、図示できたのは第11図の9～16の8点である。
- 〔時 期〕 縄文時代中期中葉に位置づけられる。
- ◆第6号溝状遺構 【第8図、第11図】
- 〔位 置〕 C-9、D-9.10グリットに位置する。
- 〔規 模〕 南北方向より東西方向へ湾曲している。長さ11.7m、幅は0.50m～1.30m。深さは最大値で0.15mと非常に浅い。
- 〔覆 土〕 黒褐色土を呈し、しまり・粘性がややありローム粒子を少量含んでいる。
- 〔施 設〕 32号土坑が西側に付随する。遺物の確認が出来なかつたため6号溝に関係するものは不明である。
- 〔遺 物〕 縄文時代中期曾利式の土器が出土している。第11図の20は両耳把手壺である。
- 〔時 期〕 縄文時代中期後半に位置づけられる。



第5図 5号・6号・7号住居跡



第6図 集石土坑(12号土坑)



15号土坑

- 1 暗褐色土 T. 3193/2 しまりあり、粘性若干かける
 2 橙褐色土 T. 3192/3 しまりあり、粘性若干かける
 3 黄褐色土 T. 3193/2 しまりあり、粘性若干かける。モールドブロック少含む
 4 灰褐色土 T. 3193/4 しまりあり、粘性若干かける。モールドブロック含む

16号土坑

- 1 黄褐色土 1018 しまりあり、古子粘性あり
 2 黄褐色土 1019 しまりあり、古子粘性あり、ローム粘子少含む

20号土坑

- 1 暗褐色土 T. 3193/4 しまり若干あり、粘性若干あり
 2 橙褐色土 T. 3192/3 しまりあり、粘性若干あり、ローム粘子少含む
 3 黄褐色土 T. 3192/2 しまりあり、粘性若干あり、モールドブロック含む
 4 灰褐色土 T. 3192/4 粘性あり、モールドブロック含む

23号土坑

- 1 暗褐色土 T. 3193/4 しまりあり、粘性若干かける。機上粘子少含む
 2 橙褐色土 T. 3192/3 しまりあり、粘性若干かける。
 3 黄褐色土 T. 3193/4 しまりあり、粘性若干かける。機上粘子多含む
 4 灰褐色土 T. 3194/4 3層よりしまりかける

22号土坑

- 1 暗褐色土 T. 3193/4 しまりあり
 2 黄褐色土 T. 3193/6 しまりあり、ローム質土がブロック状に入る

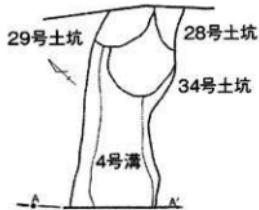
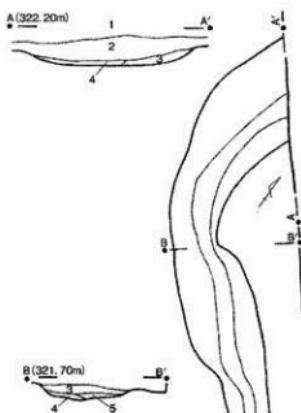
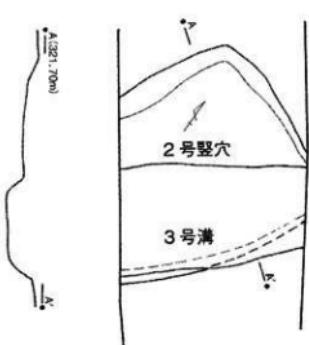
26号土坑

- 1 黄褐色土 T. 3193/2 しまりあり、粘性若干あり、モールド粘子少含む
 2 橙褐色土 T. 3193/4 しまりあり、粘性若干あり、モールド粘子少含む



第7図 土坑（縄文時代）

2号竪穴

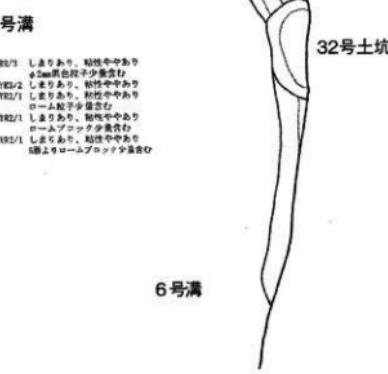


4号溝

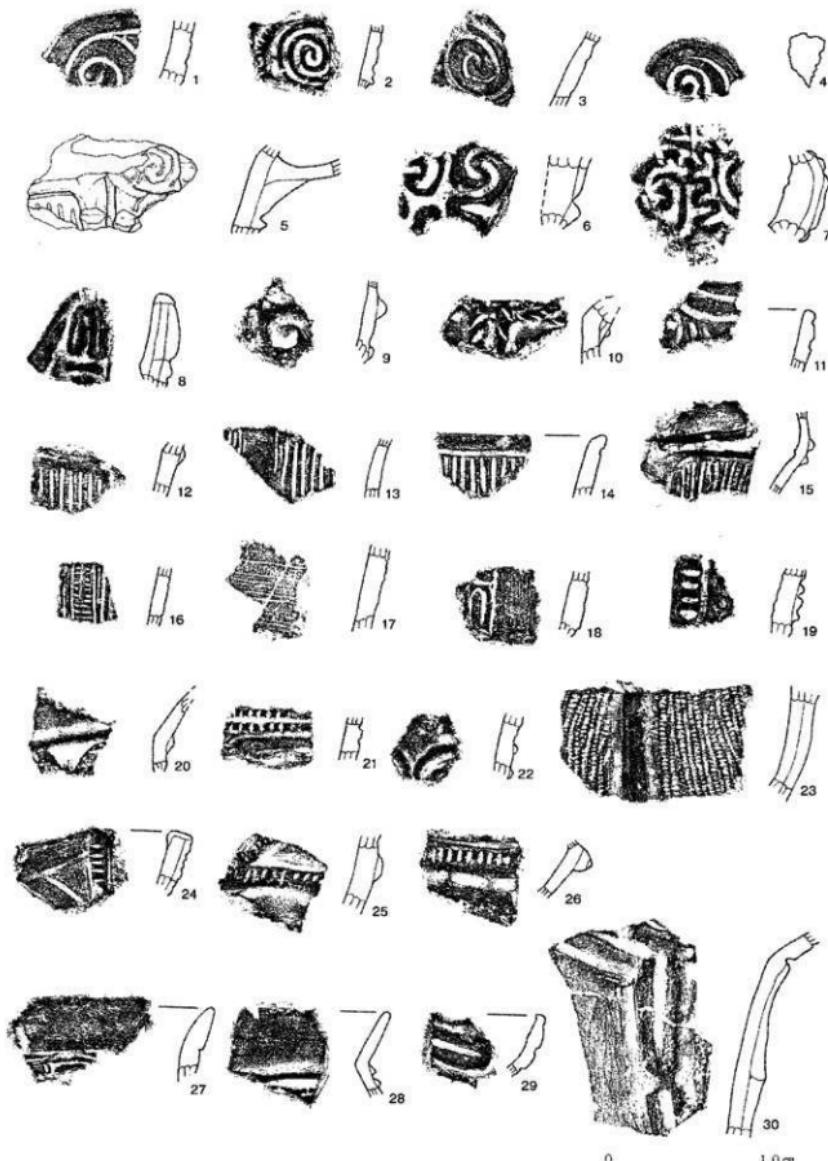
- 1 灰土
- 2 黑褐色土 7.51R2/2 しまりあり、粘性ややあり
黒色粒子△2mm少度含む
- 3 黑褐色土 7.51R2/2 しまりあり、粘性ややあり
黒色粒子△2mm少度含む
- 4 灰褐色土 7.51R2/2 しまりあり、粘性ややあり
ローム粒子少度含む
- 5 黑色土 7.51R2/1 しまりあり、粘性ややあり
ロームブロック少度含む
- 6 灰色土 7.51R2/1 しまりあり、粘性ややあり
ロームブロック少度含む
- 7 黑褐色土 7.51R2/2 しまりあり、粘性ややあり
黑色粒子△1mm少度含む

- 1 灰土
- 2 黑褐色土 10YR2/3 しまりあり、粘性ややあり
△5mm黒色粒子少度含む
- 3 黑褐色土 7.51R2/2 しまりあり、粘性ややあり
黑色粒子△2mm少度含む
- 4 灰土 7.51R2/1 しまりあり、粘性ややあり
ローム粒子少度含む
- 5 黑色土 7.51R2/1 しまりあり、粘性ややあり
ロームブロック少度含む
- 6 灰色土 7.51R2/1 しまりあり、粘性ややあり
△5mmロームブロック少度含む

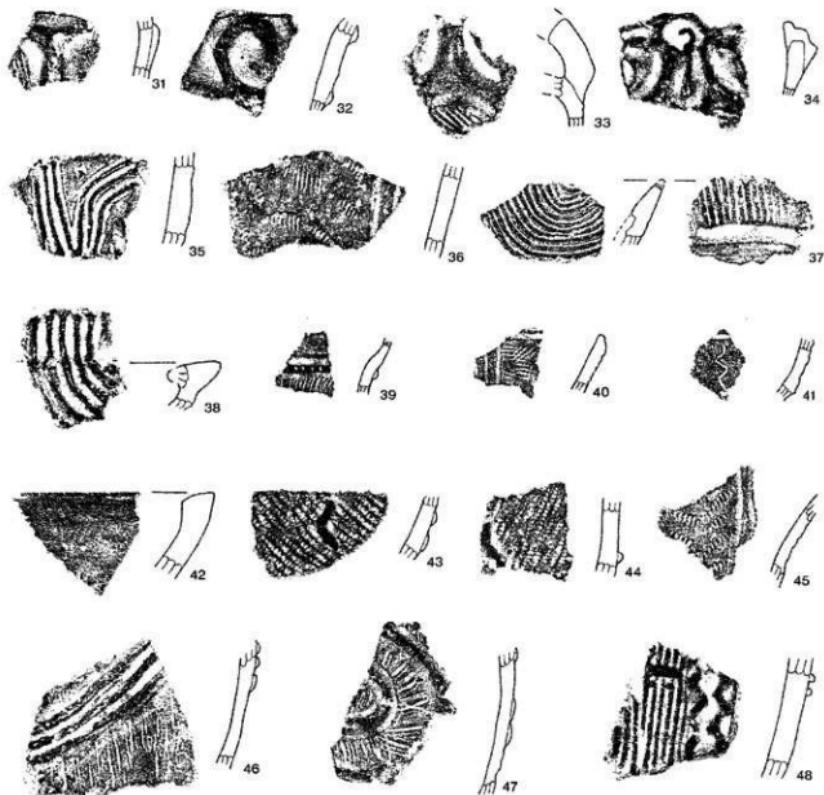
6号溝



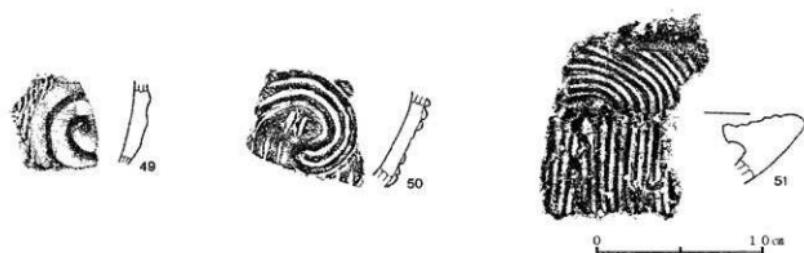
第8図 2号竪穴・4号および6号溝状造構（縄文時代）



第9図 5号住居跡出土土器



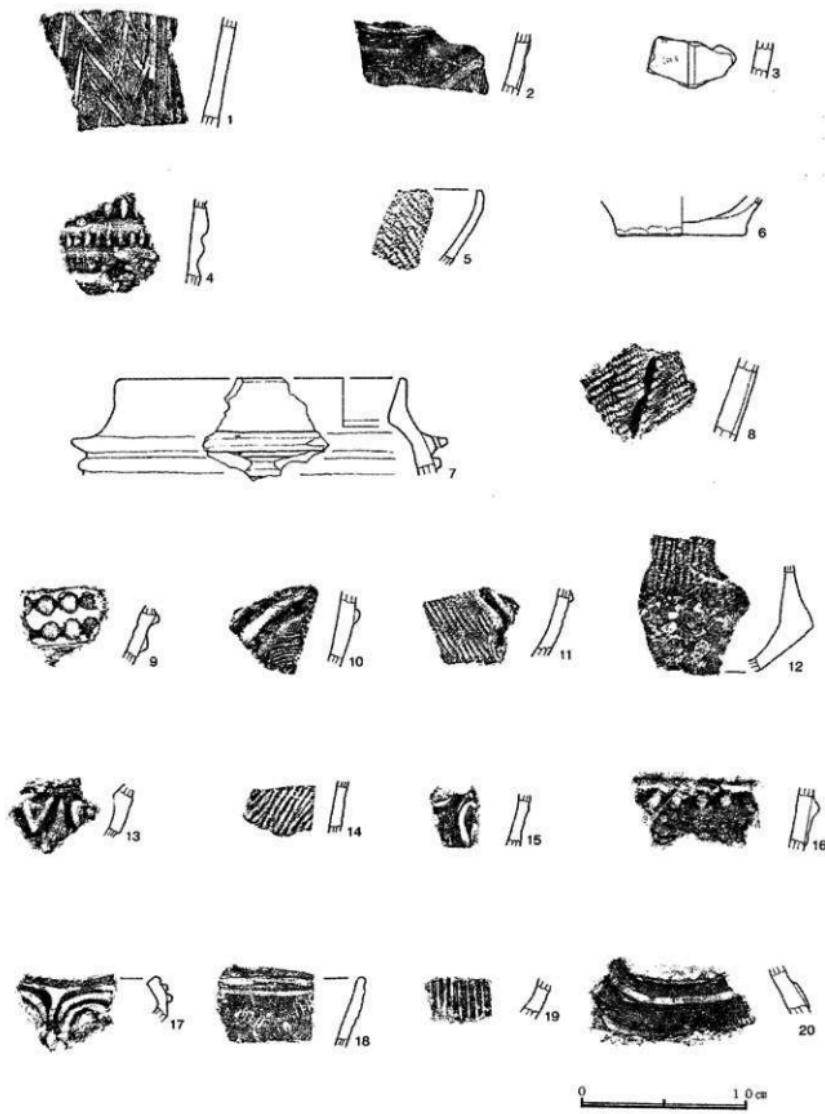
6号住



0 1.0 cm

7号住

第10図 6号・7号住居跡出土土器



第11図 土坑・2号竪穴・溝状遺構出土土器（縄文時代）

第2節 弥生時代以降の遺構と遺物

(1) 壁穴住居跡

本遺跡の弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡は4軒が確認された。しかし、調査区外などに阻まれ完全な形を検出するのは難しく、出来る限り拡張を試みた。その結果、1号住居では土器集中土坑2基を確認し、赤鉄鉢などが出土した。2号住居跡、3号住居跡では炉が検出されている。各住居から検出した遺物の詳細は、【第2表土器観察表】を参照されたい。

◆第1号住居跡【第12図、第20図、第21図】

〔位置〕A-1.2、B-1.2に位置する。

〔形状〕コーナー部分が搅乱のため正確ではないが、隅丸方形を呈するものと考えられる。

〔規模〕直径(4.6)m、短径4.2mを計る。

〔覆土〕遺物の検出の多い黒褐色土が主体となる。

〔壁〕最大壁高は0.2mではほぼ垂直に立ち上がる。住居跡南側と西側で確認できた。

〔床〕ほぼ平坦で所々搅乱されているが、貼り床の硬化面が全体的に確認できた。

〔炉〕中央部から土坑3付近にかけて薄い焼土層が確認できたが、明確な炉の確認は出来なかった。
しかし、時期を考慮すると、その時点に地床炉のあった可能性が高い。

〔施設〕住居内土坑が3基、ピットが9基確認された。周溝も南東に若干確認できた。土坑1の床面からは15cmの石が検出された。覆土には、焼土・炭化物が含まれており、炉に匹敵する施設の可能性も考えられる。

〔遺物〕弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が検出された。第20図の1～8は弥生時代後期の土器で特に第20図の6～8は弥生終末期～古墳早期の週間式（東海系）と考えられる。

土坑1からは3層に重なる土器片第21図の15～20が集中して16を取り囲むように見つかった。

16は完形である。土坑3からは、土器片が集中して出土した。貯蔵穴の可能性もある。土坑2からは6cm～13cmのベンガラの原料と考えられる赤鉄鉢が5点検出された。土坑2の南西には粘土も見つかっている。赤鉄鉢については第V章にて詳しく専門的見地を掲載する。

〔時期〕前述の見つかった土器の状況から、弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられる。

◆第2号住居跡【第13図、第22図】

〔位置〕B-3.4、C-4グリットに位置する。

〔形状〕隅丸方形を呈する。

〔規模〕現在値は直径3.9m、短径(1.55)mを計る。

〔覆土〕焼土・炭化物を含む黄褐色土が主体である。

〔壁〕壁高は0.35mではほぼ垂直に立ち上がる。

〔床〕ほぼ平坦で貼り床と思われる硬化面がみられる。中央部より北に向かって焼土が20cmほど堆積している。

〔炉〕焼土内にある土坑1が地床炉と考えられる。

〔施設〕ピットが3ヶ所確認できた。いずれも柱穴と考えられる。

〔遺物〕古墳時代の高杯、台壇壺などが出土している。

〔時期〕古墳時代前期に位置づけられる。

◆第3号住居跡【第13図、第22図】

〔位置〕C-6グリットに位置する。

〔形状〕隅丸方形を呈する。

〔規模〕現在値は直径(2.6)m、短径(1.35)mを計る。

〔覆土〕若干の焼土を含む黄褐色土が主体である。

- 〔壁〕壁高は0.15mでほぼ垂直に立ち上がる。
- 〔床〕貼り床と思われる硬化面を確認できた。焼土の搅乱している炉の北側が若干もりあがっているが、それ以外はほぼ平坦である。
- 〔炉〕調査区外に半分ほどかかっているため全容は確認出来なかつたが該期の地床炉と思われる。
- 〔施設〕ピットが3ヶ所確認できた。北側の2ヶ所が柱穴と考えられる。
- 〔遺物〕掲載した5点の土器はすべて台付壺の破片である。
- 〔時期〕古墳時代前期に位置づけられる。

◆第4号住居跡【第14図】

- 〔位置〕J-14グリットに位置する。
- 〔床〕少量の焼土、炭化物が点在している。
- 〔炉〕直径0.4m、短径0.34mを計る。中心部に石を配置した枕石炉と考えられる。
- 〔遺物〕遺物はほとんど検出できなかつた、図示できたのは1点のみで台付壺の破片と思われる。
- 〔時期〕遺物の出土が少量のため、時期の決定は難しかつた。枕石炉の性格上、弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる。
- 〔特記事項〕枕石炉は近隣の上の平遺跡などからも見つかつてゐる。台石として使用する例もあるが、本遺跡の枕石は比較的小型で、まわりに数個の薄く削った石が添うように検出された。中心の石は磨り面が顯著で、磨石等を転用した可能性が考えられる。

(2) 方形周溝墓

◆方形周溝墓【第15図、第23図】

- 〔位置〕I-22.23、J-22.23、K-22.23に位置する。
- 〔規模〕南西コーナーにブリッジをもつ。東辺溝を欠く。北辺溝約5.56m(現在)、南辺溝約4.4m(現在)、西辺溝7.4m。溝の深さ0.4m～0.8mを計り、ほぼ垂直に立ち上がる。
- 〔遺物〕遺物は南辺溝に集中して出土している。北辺溝からは櫛描波状文と円形貼付文をもつ弥生土器が出土している。南辺溝出土の第23図の5は体部に穿孔のある高杯である。
第23図の7.8は赤彩された高杯の脚部。第23図の9は脚部に4ヶ所の穿孔のある高杯で第23図の17～23は台付壺である。
- 〔時期〕出土した土器から、弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられる。
- 〔特記事項〕初期時点では、南辺を普通の溝として掘り始めたが、彩色された高杯などが出土し方形周溝墓を考えた。北方向には対峙する溝も見つかり、西側を拡張した結果、西辺溝とブリッジを確認することができた。時期は前述の通り弥生時代後期から古墳時代前期で、先に報告した1号住居跡と同時期の遺構と考えられる。

(3) 土坑

弥生時代以降の土坑は、26基である。3号土坑、25号土坑は土坑墓の可能性がある。13号土坑は土器敷き炉を考えた。

縄文時代同様、各土坑の規模等の詳細は【第1表・土坑・ピット一覧表】を参照されたい。

◆第13号土坑【第16図】

- 〔位置〕E-10グリットに位置する。
- 〔形状〕方形を呈する。
- 〔規模〕直径1.0m、短径0.9mを計る。
- 〔覆土〕焼土粒子、炭化物を含む暗茶褐色土が主体である。
- 〔床〕若干凸凹している。北側は焼土に覆われている。
- 〔遺物〕内外面に緻密に刷毛目を施した大型の土器が出土した。底部は3個体分があり、表面剥離が激しく、割れ口はきれいに削られている。

〔特記事項〕土器は焼けた痕が顕著で剥離しており、すべてを復元することは出来なかった。

土器捨て場、土器焼成遺構などを考えたが、底部以外の口縁部、肩の部分などの上部は一切無く、床面より15~20cmの層にしか出土しなかった。遺構全面に広がっており焼土も確認できたことから土器敷き炉の可能性が高い。しかし、周辺には貼り床やピットなどは確認できなかつたので、単独炉と考えられる。

◆その他の土坑【第17図、第18図、第24図】

3号土坑からは10cm~40cmの石に囲まれるように完形の陶器（第24図-4）が出土している。

近世の埋葬施設と考えられる。25土坑は20cmの深さのピットをもつ古墳時代の土坑でS字壇（第24図-11）が出土している。土坑墓の可能性がある。

(4) 第1号竪穴状遺構【第18図、第24図】

〔位置〕C-8グリットに位置する。

〔特記事項〕出土土器は1点しかなく、ピットなどの施設も見つからなかつた。覆土には多量の炭化物が検出されたが比較的新しいものであり、焼失住居とも考えにくかった。時期は不明だが新しい時代の焼却施設と考えられる。

(5) 溝状遺構

弥生時代以降の溝は5条としたが、ほとんど出土遺物は無く、時期は不明である。

◆第1号溝状遺構【第19図、第24図】

〔位置〕J-14,15グリットに位置する。

〔規模〕北東から南西にかけて現存長さ3.76m、幅0.1m、確認面からの深さは0.15mを計る。

〔遺物〕S字壇の破片が数点出土している。

〔時期〕古墳時代前期に位置づけられている。

◆第2号溝状遺構【第19図、第24図】

〔位置〕L-19グリットに位置する。

〔規模〕南北に長さ3.05m、幅0.13m~0.2m、確認面からの深さ0.5mを計る。北側が若干拡幅している。

〔覆土〕ロームブロックを少量含む黒褐色土が主体である。

〔遺物〕台付壺の脚部と須恵器が出土している。

〔時期〕出土した土器片から古墳時代前期に位置づけられる。

◆第3号溝状遺構【第19図】

〔位置〕H-12グリットに位置する。

〔規模〕北東より南東に長さ2.35m、幅1.0m、深さ0.25mを計る。

〔形状〕幅もほとんど変わらず、湾曲のない真っ直ぐな形状を呈する。

〔時期〕2号竪穴状遺構と重複しているが、出土遺物は見つからず、時期は不明である。

◆第5号溝状遺構【第19図】

〔位置〕H-12グリットに位置する。

〔規模〕南北に長さ2.3m、0.5m~1.0m、深さ30mを計る。

〔形状〕検出できた部分のはば中央が狭く、絞ったような形状である。

〔時期〕遺物が出土しなかつたため、時期不明である。

◆第7号溝状遺構【第19図】

〔位置〕S-41グリットに位置する。

〔規模〕東西に長さ2.0m、幅1.1m、深さ0.3mを計る。深さ0.99mの33号土坑が東端に重複しているが、両遺構とも遺物の出土がないため関係性、時期などは不明である。

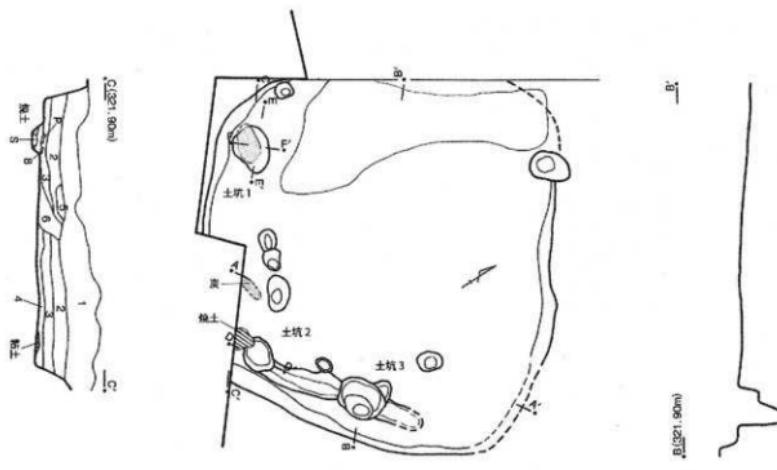
(6) 遺構外出土器【第25図】

遺構外より出土した土器を時期の古いものより順に示した。

第25図の1は楕円の押型を横位に施した縄文早期の押腹文土器である。第25図の2～8は縄文時代中期の土器で、第25図の8には網代痕が残っている。第25図の9～16は古墳時代前期の土器。第25図の17は18世紀代の焼拂である。法量等の詳細は第2表 土器観察表(3)を参照されたい。

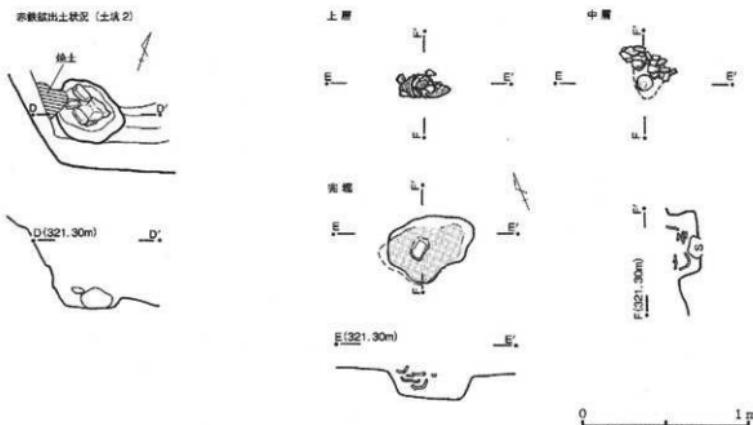
(7) 石器・その他の遺物【第26図～第28図】

本遺跡からは数種類の石器、土偶、土製円盤、紡錘車、古鏡などが出土している。第26図の1～5は石鎌、1はほぼ完全な形で残っている。第26図の6～10は石錐、第26図の11～14は石匙、12は完形。第26図の16～18は搔器、第27図の19～26は打製石斧。すべて縄文時代の石器である。他に多孔石、敲石が出土している。第28図の30は縄文時代中期の土偶で右の手と思われる。第28図の31～32は側面全周が研磨された土製円盤である。第28図の33は弥生時代の紡錘車。第28図の34は大正時代～昭和時代の一錢青銅貨である。

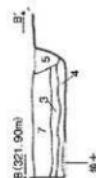
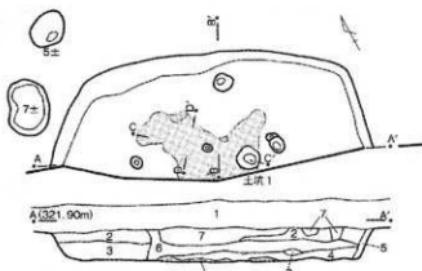


1号住居跡

- 1 灰土
- 2 黑褐色土 T. 5153/2
- 3 黑褐色土 T. 5153/2 黄褐色土含砂
- 4 黄褐色土 T. 5156/6 黑褐色土少量含砂
- 5 黄褐色土 T. 5156/6
- 6 黑褐色土 T. 5156/6
- 7 黑褐色土 T. 5156/4 灰土颗粒、炭化物若干含砂
- 8 黄褐色土 T. 5156/6 灰土颗粒、炭化物含砂



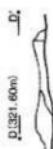
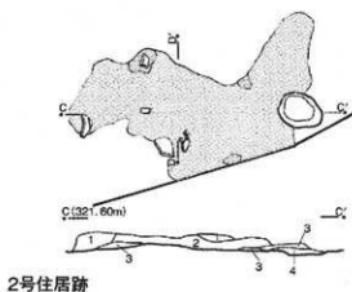
第12図 1号住居跡・住居内土坑



2号住居跡

1 表土 T. STW6/6 黒褐色含む
2 貫入色土 T. STW6/6 黒褐色含む
3 黄褐色土 T. STW6/6
4 黄褐色土 T. STW6/6 漢化物、漆片、鐵片含む
5 黄褐色土 T. STW6/6 カスカク、しまりあり
6 黄褐色土 T. STW6/6 やわらかい
7 黄褐色土 T. STW6/6 鹿蹄形多量含む

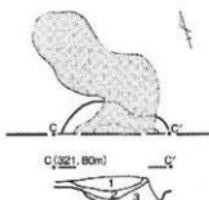
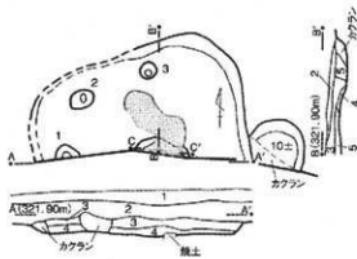
0 1 2 m



2号住居跡

1 黃褐色土 ロームブロック含む
2 黃褐色土 地上廐子、碳化物含む
3 黄褐色土 ロームブロック、地上廐子、碳化物含む
4 黄褐色土 ロームブロック、地土板子含む

0 1 1 m

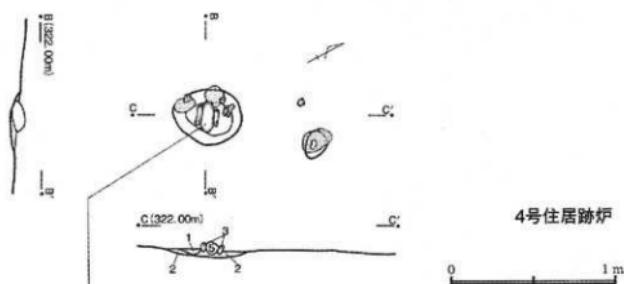
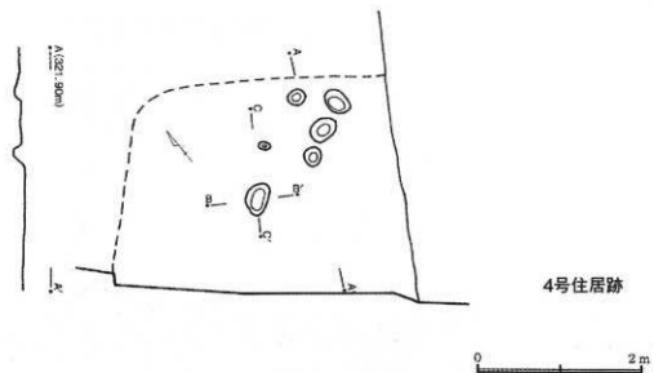


0 1 1 m

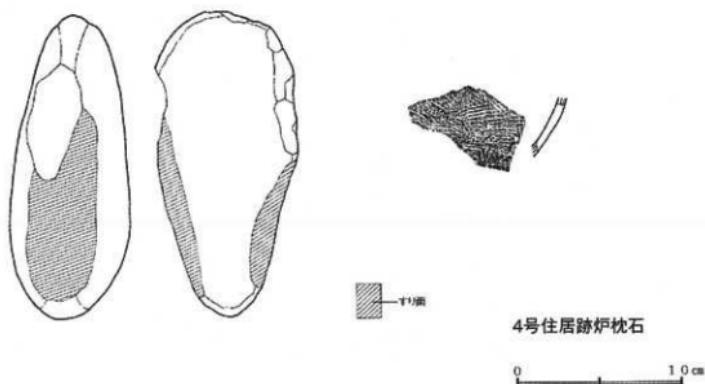
1 表土
2 黄褐色土 10T23/2
3 贯入色土 T. STW6/6
4 黄褐色土 T. STW6/6
5 黄褐色土 T. STW6/6
6 黄褐色土 T. STW6/6

1 金り、既生牛やあも
2 しまり、既生牛やあも ローム板子子4cm少數、黒褐色土含む
3 こじり、ロームブロック含む
4 黄褐色土

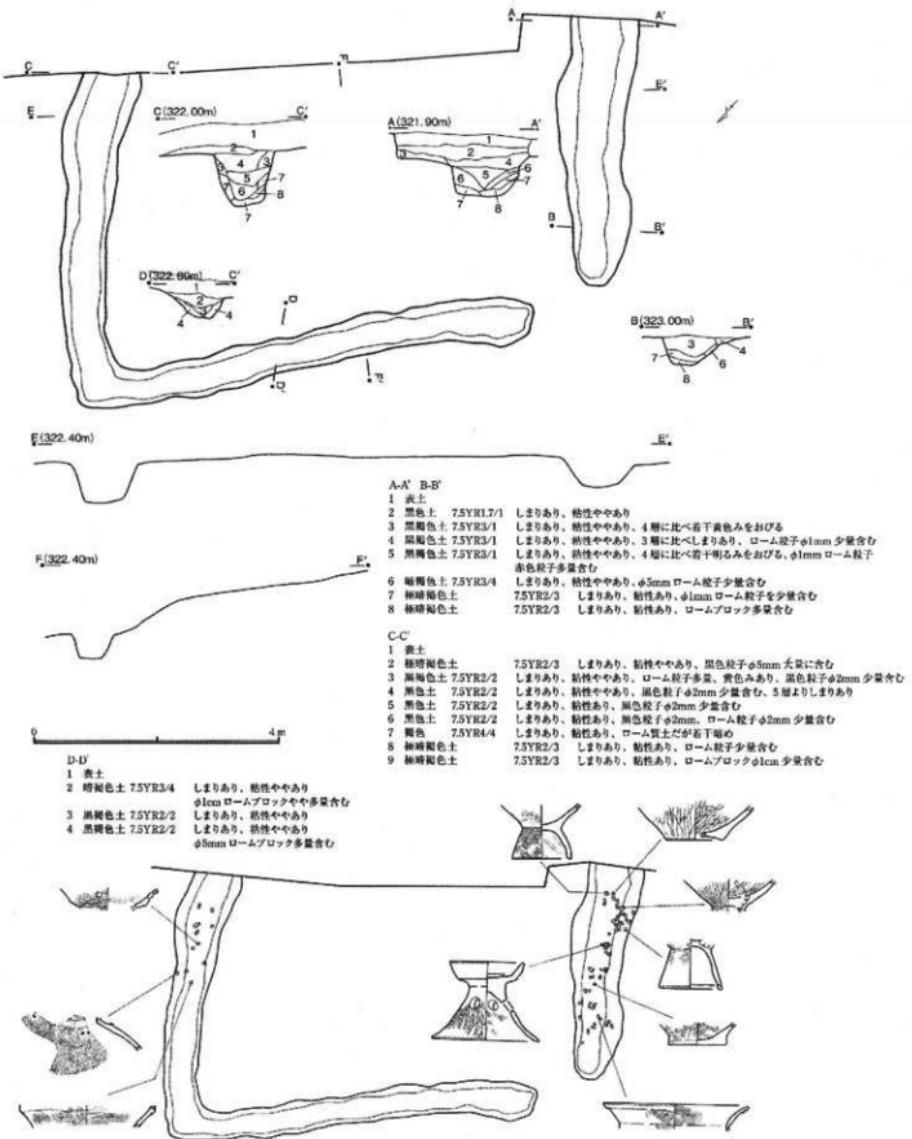
第13図 2号・3号住居跡・同炉跡



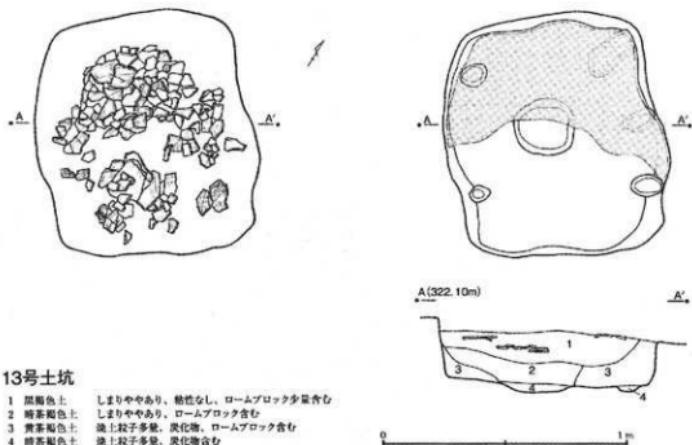
1 基盤色土 16YR2/3 しまりやや次ける、堅性ややあり、炭化物少含む
2 特徴色土 16YR2/3 しまりあり、堅性あり、赤色斑子+1m少含む



第14図 4号住居跡・同炉跡

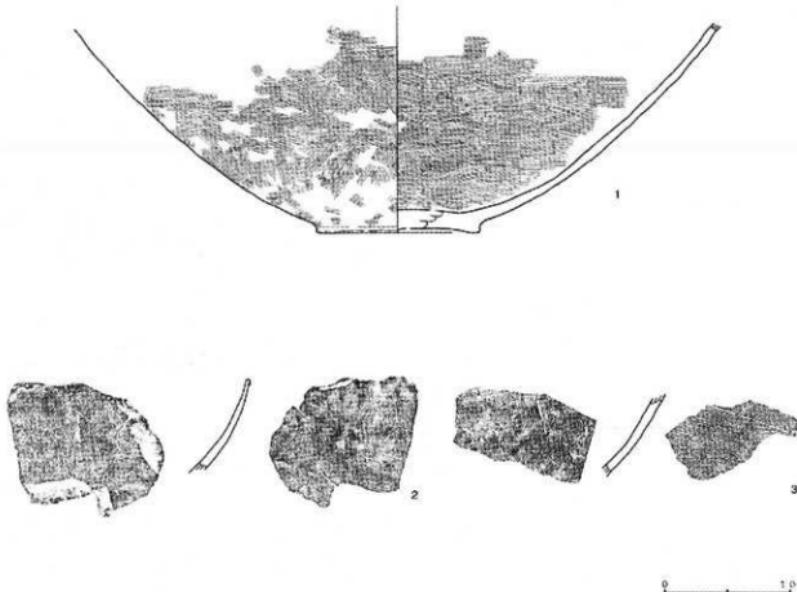


第15図 方形周溝墓

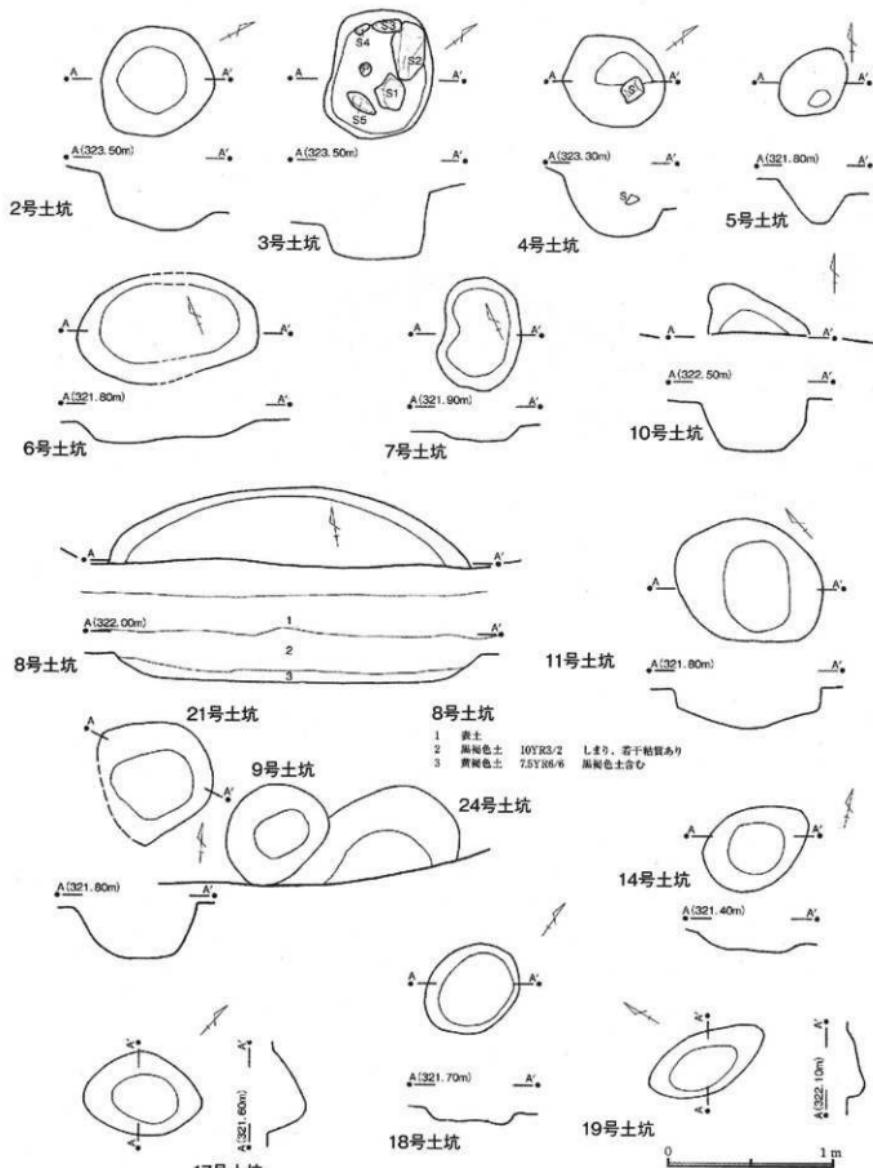


13号土坑

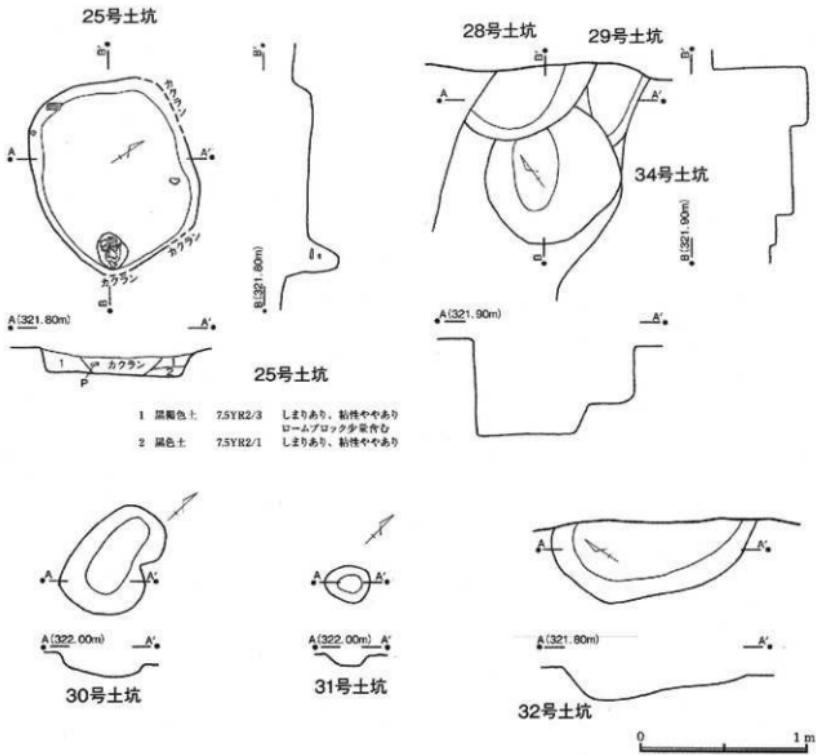
- 1 黒褐色土 粒度ややあり、粘性なし、ロームブロック少含む
- 2 暗茶褐色土 粒度ややあり、ロームブロック含む
- 3 黄茶褐色土 地上粒子多量、炭化物、ロームブロック含む
- 4 暗茶褐色土 地上粒子多量、炭化物含む



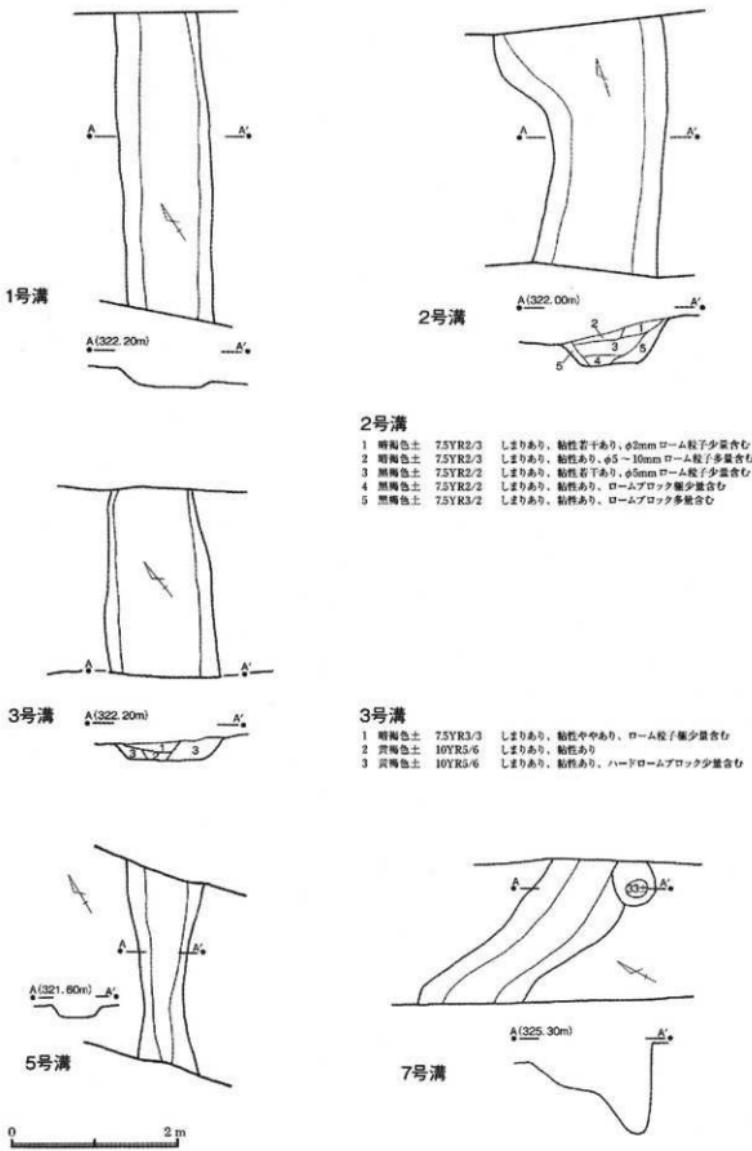
第16図 13号土坑・同出土土器



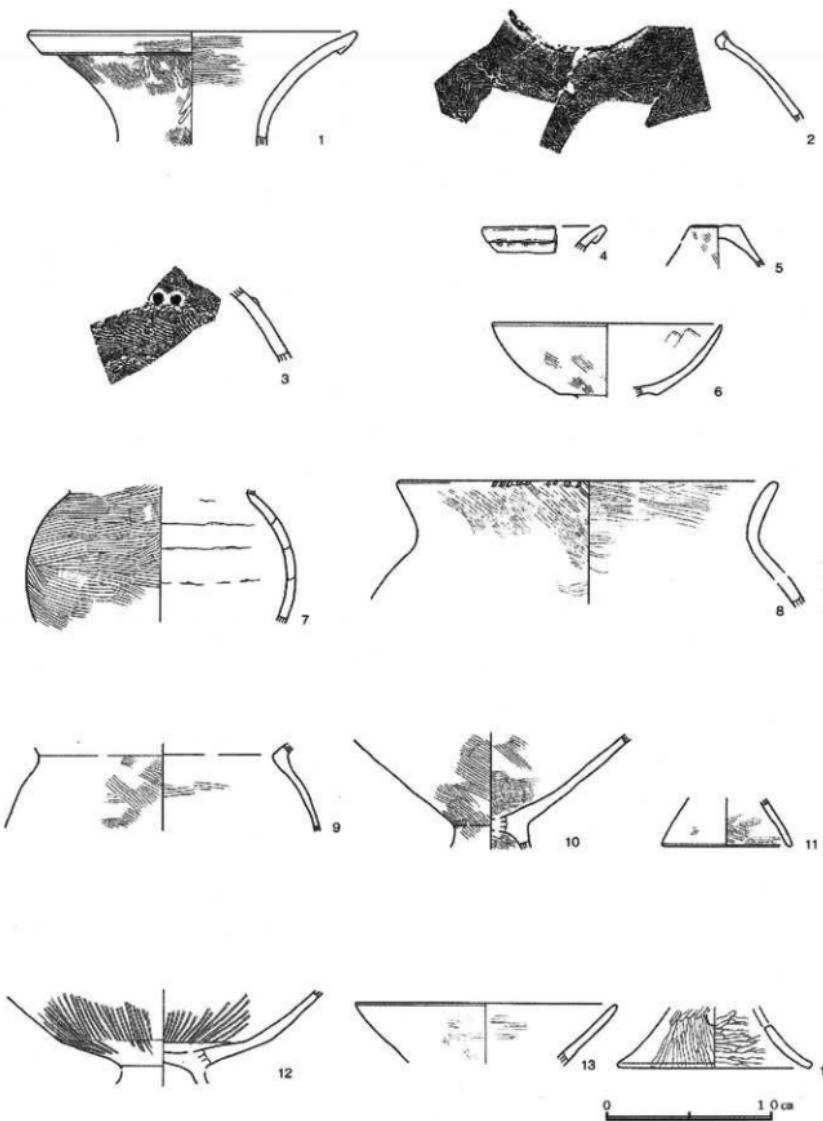
第 17 図 土坑(1)



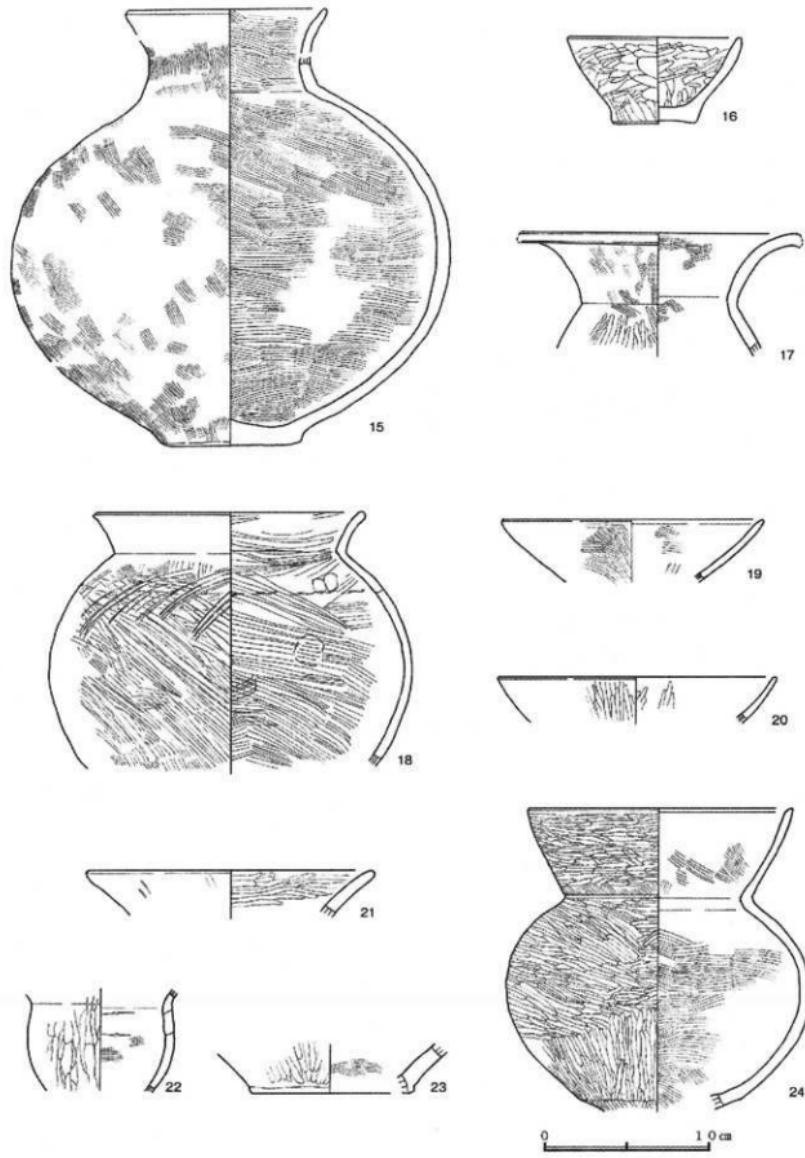
第18図 土坑(2)・1号竪穴状遺構



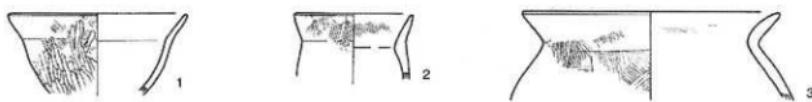
第19図 溝状構造



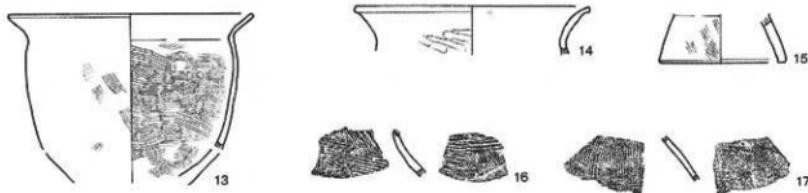
第20図 1号住居跡出土土器(1)



第 21 図 1 号住居跡出土土器(2)



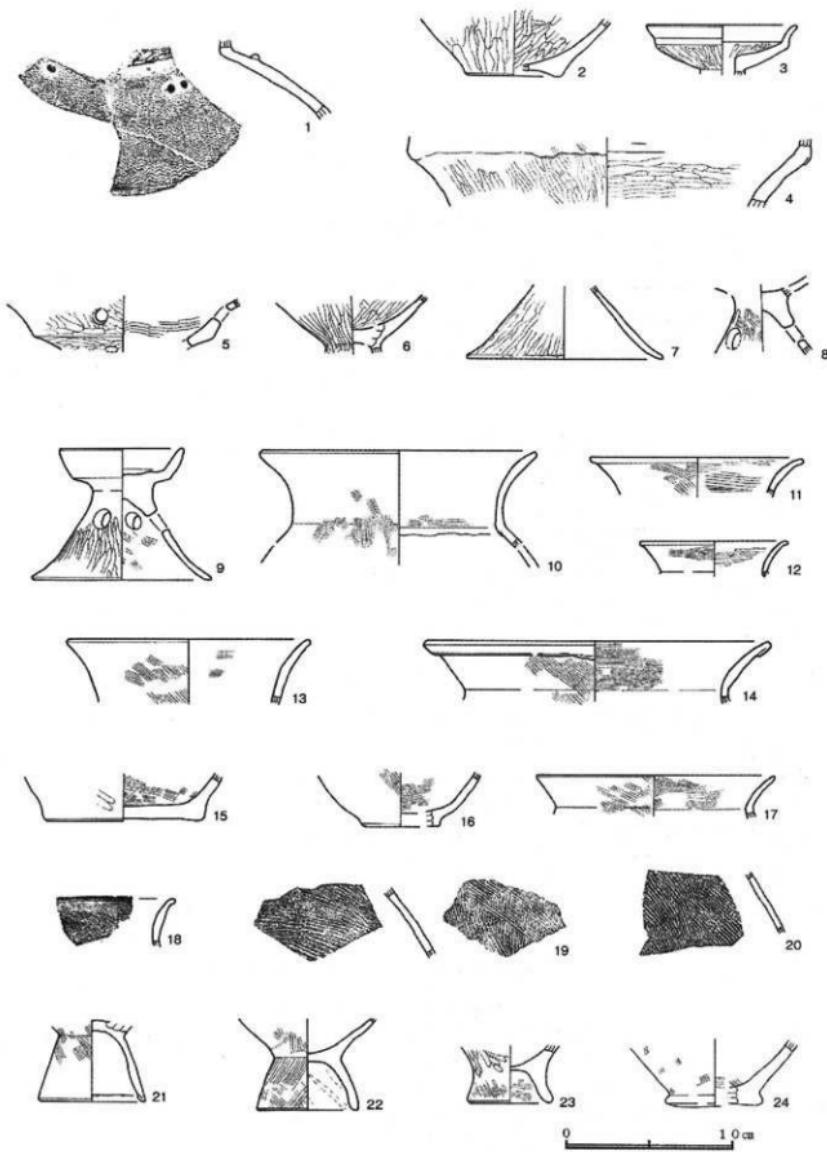
2号住居跡



3号住居跡



第22図 2号・3号住居跡出土土器



第23図 方形周溝墓出土土器



2号土坑



2



3



3号土坑



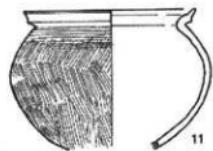
5号土坑



6



8号土坑



25号土坑



34号土坑



1号竖穴



1号溝



1号溝

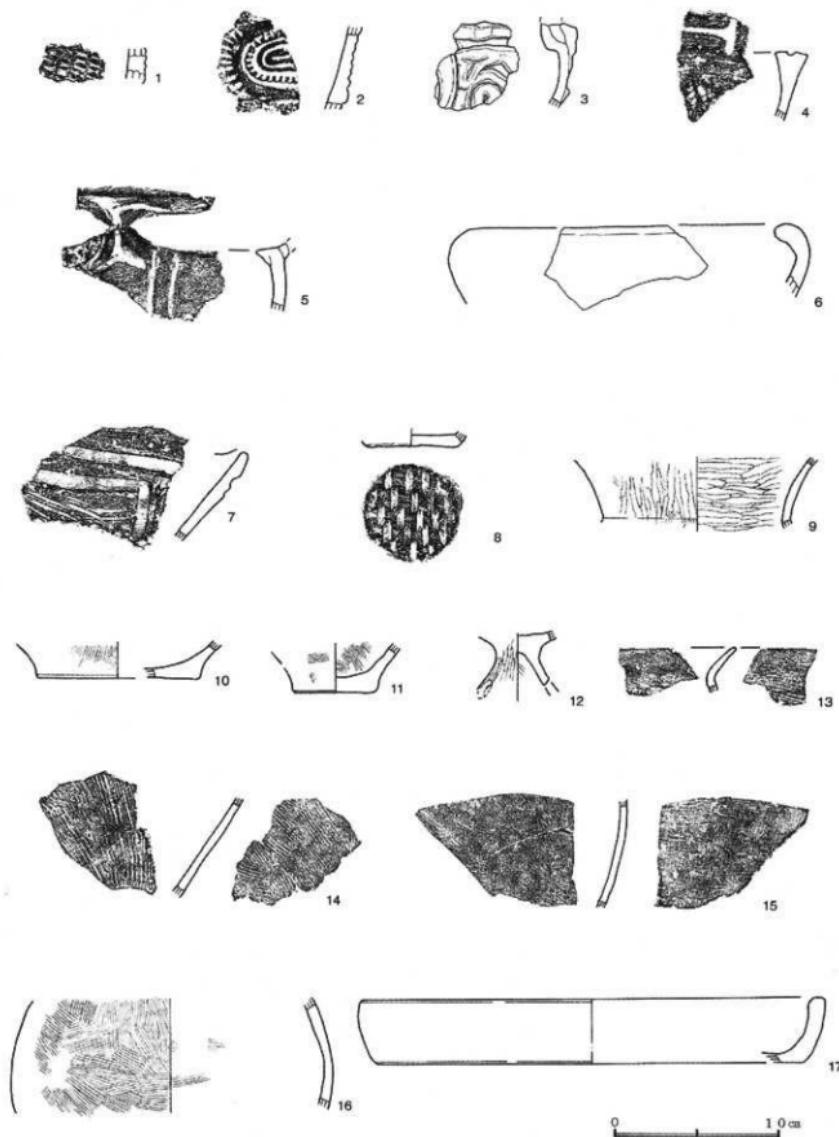


2号溝

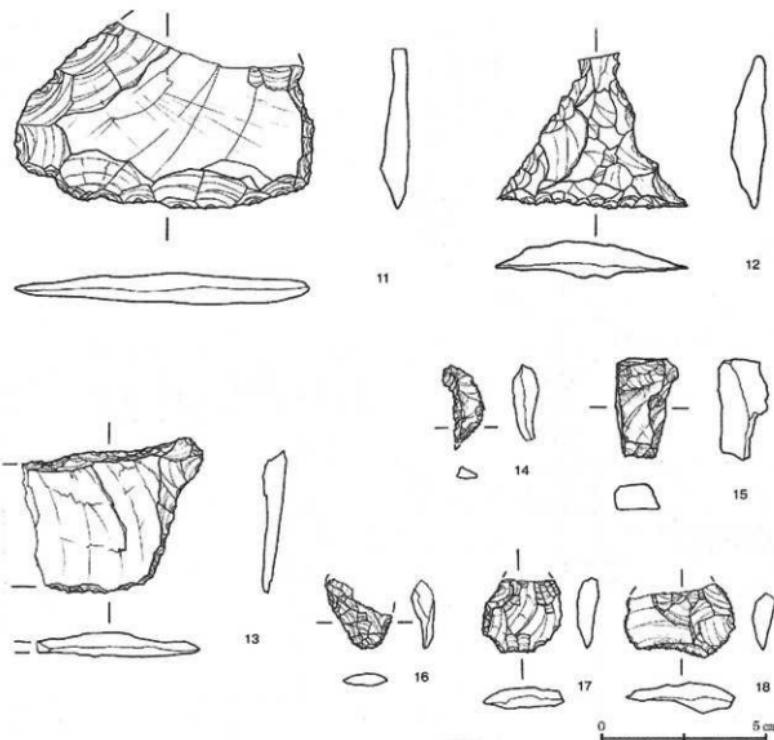
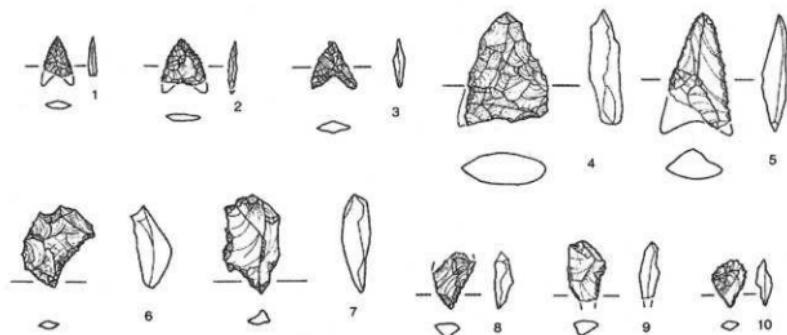


0 10 cm

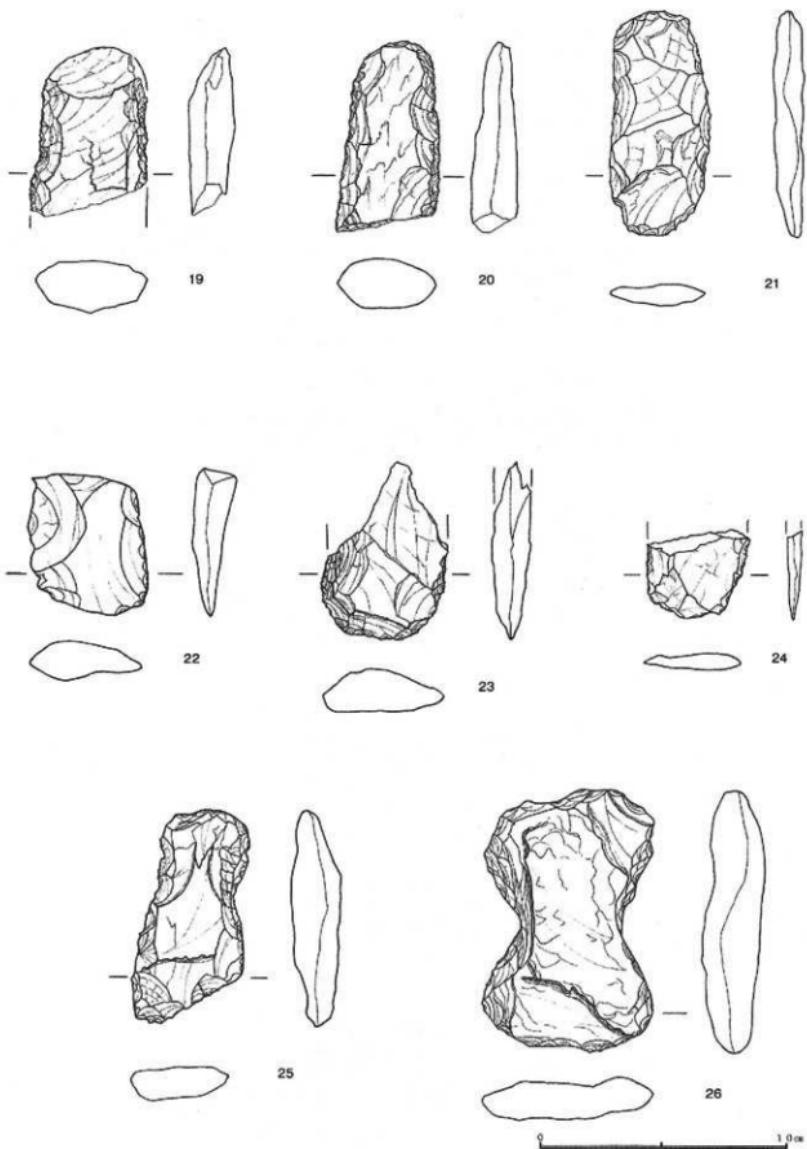
第24図 土坑・1号竪穴・溝状遺構出土土器



第25図 遺構外出土土器



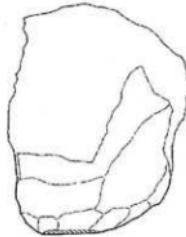
第26図 出土石器(1)



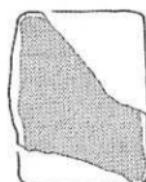
第27図 出土石器(2)



27



28



29

使用面



30

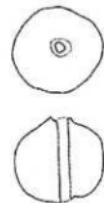
割れ口



31



32



33

0 1.0 cm



34

第28図 出土石器(3)・その他の出土遺物

第1表 土坑・ピット一覧表

遺構名	位置 (グリッド)	法量(cm)				時期	備考/その他
		平面形	長軸	短軸	深さ		
1号土坑	N-36	隅丸方形	0.68	0.59	0.25	縄文中期	
2号土坑	N-36	円形	0.72	0.65	0.33	古墳前期	
3号土坑	N-36	円形	0.79	0.60	0.43	近世 18世紀	
4号土坑	N-36	楕円形	0.62	0.56	0.39		
5号土坑	B-3	楕円形	0.49	0.37	0.22	古墳前期	
6号土坑	B-4	不整楕円形	1.10	0.58	0.15		
7号土坑	B-3	不整楕円形	0.60	0.46	0.72		
8号土坑	C-4	楕円形	2.09	0.48	0.20	古墳前期	
9号土坑	C-5	円形	0.65	0.60	-		
10号土坑	C-6	楕円形	0.76	0.46	0.05		
11号土坑	C-8	円形	0.98	0.69	0.19		
12号土坑	E-9	不整円形	1.20	1.06	0.24	縄文中期	集石土坑
13号土坑	E-10	隅丸方形	1.01	0.84	0.28	古墳	土器窯炉
14号土坑	F-10	不整楕円形	0.68	0.48	0.17		7号住(想定図内)
15号土坑	F-10	隅丸方形	0.88	0.61	0.22	縄文中期	7号住(想定図内)
16号土坑	F-11	隅丸方形	0.98	0.76	0.22	縄文中期	
17号土坑	G-11	楕円形	0.75	0.52	0.06		
18号土坑	G-11	楕円形	0.63	0.52	0.70		
19号土坑	G-11	楕円形	0.78	0.38	0.14		
20号土坑	G-12	楕円形	0.86	0.62	0.15	縄文中期	井戸尻式
21号土坑	C-5	楕円形	0.77	0.67	0.33		
22号土坑	B-4	不整楕円形	0.53	0.23	0.17	縄文中期	
23号土坑	B-4	不整楕円形	1.26	0.80	0.09	縄文	
24号土坑	C-5	楕円形	1.02	0.52	-		
25号土坑	B-5	隅丸方形	2.42	1.94	0.16	古墳前期	S字窓出土
26号土坑	E-10	隅丸方形	0.65	0.46	0.7	縄文中期	
27号土坑	E-10	円形	0.66	0.38	-	縄文中期	
28号土坑	I-13	不整楕円形	0.55	0.35	0.35		
29号土坑	I-13	不整楕円形	0.56	0.46	0.61		
30号土坑	I-14	不整楕円形	0.64	0.36	0.09		
31号土坑	J-13	不整楕円形	0.28	0.24	0.08		
32号土坑	D-10	不整楕円形	1.12	0.52	0.10		
33号土坑	S-41	楕円形	0.92	0.73	0.99		
34号土坑	I-13	楕円形	1.17	0.13	0.13	古墳前期	
Pit1	J-14	円形	0.35	0.30	0.19		4号住(想定図内)
Pit2	J-14	楕円形	0.32	0.22	0.14		4号住(想定図内)
Pit3	J-14	楕円形	0.34	0.26	-		4号住(想定図内)
Pit4	J-14	隅丸方形	0.23	0.22	-		4号住(想定図内)
Pit5	J-14	不整楕円形	0.18	0.13	0.04		4号住(想定図内)
Pit6	E-10	楕円形	0.36	0.31	0.15		7号住(想定図内)
Pit7	E-10	楕円形	0.28	0.22	0.14		7号住(想定図内)

第2表 土器観察表(1)

1号住

辨別No	No	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	調整	備考	
				口径	器高	底径					
第20回	1	弥生土器	折り返し口縁壺	(19.6)	--	--	茶褐色	青-白色粒子含む	内-ヨコハケメ 外-ハケ調整後ミガキ	赤形、反転	
第20回	2	弥生土器	壺	--	--	--	明赤褐色	青-白色粒子含む	表面に崩落文		
第20回	3	弥生土器	壺	--	--	--	赤茶褐色	青-白色粒子含む	輪郭構文上にボタン状跡付文		
第20回	4	弥生土器	折り返し口縁壺	--	--	--	暗茶褐色	青-灰石、砂粒含む	外-タテハケメ		
第20回	5	弥生土器	壺	--	--	--	黄茶褐色	青-石英、長石含む	外-ハケメ	一部反転	
第20回	6	弥生土器	高杯	(14.0)	--	--	黄赤褐色	青-石英、白色粒子含む	外-ハケメ	反転	
第20回	7	弥生土器	台付壺	--	--	--	褐褐色	やや粗-石英、長石含む	内-ヨコハケメ		
第20回	8	弥生土器	台付壺	(22.8)	--	--	黑褐色	やや粗-白色粒子多量含む	内-ヨコハケメ 口縁部削み 外-タテハケメ		
第20回	9	十脚器	台付壺	--	--	--	黄褐色	青-砂粒含む	内-外-ハケメ	反転	
第20回	10	土師器	台付壺	--	--	--	暗茶褐色	青-白色粒子含む	内-外-ハケメ	反転	
第20回	11	土師器	台付壺(脚部)	--	--	8.0	赤褐色	青-長石、石英多量に含む	内-外-ハケメ	反転	
第20回	12	土師器	高杯	--	--	--	赤褐色	青-砂粒含む	内-外-ミガキ	反転	
第20回	13	土師器	高杯	--	--	--	明黄褐色	青-砂粒含む	内-外-ハケメ		
第20回	14	土師器	高杯	--	--	11.6	赤茶褐色	青-石英含む	内-外-ミガキ	穿孔、反転	
第21回	15	土師器	壺	--	12.0	27.0	8.8	茶褐色	青-石英、長石多量に含む	内-ヨコハケメ 外-タテハケメ	残存率 80% 住居内土坑①出土
第21回	16	土師器	小豆鉢	10.4	5.3	4.6	赤茶褐色	青-石英、長石含む	内-外-ミガキ	变形 住居内土坑①出土	
第21回	17	土師器	壺	(17.0)	--	--	黄褐色	青-砂粒含む	内-ハケメ 外-口縁部タテハケメ 体部ミガキ	反転 住居内土坑①出土	
第21回	18	土師器	壺	--	16.0	--	赤茶褐色	青-砂粒、金葉母若干含む	内-外-ハケメ	反転 住居内土坑①出土	
第21回	19	土師器	高杯	--	(16.0)	--	茶褐色	青-長石含む	内-外-ハケメ	反転 住居内土坑①出土	
第21回	20	土師器	高杯	--	(17.0)	--	茶褐色	青-白色粒子若干含む	内-外-ミガキ	反転 住居内土坑①出土	
第21回	21	土師器	壺	--	17.2	--	黄茶褐色	青-白色粒子含む	内-ミガキ	反転 住居内土坑①出土	
第21回	22	土師器	小豆甌	--	--	--	黄茶褐色	青-石英多量に含む	内-輪積みハケメ 外-ハラミガキ	反転	
第21回	23	土師器	壺	--	--	9.8	黄茶褐色	やや粗-白色粒子含む	内-ヨコハケメ 外-ミガキ		
第21回	24	土師器	丸底甌	--	16.0	18.5	--	赤茶褐色	青-長石、石英	内-ハケメ、ナナ	反転

2号住

辨別No	No	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	調整	備考
				口径	器高	底径				
第22回	1	土師器	小型鉢	(8.6)	--	--	赤褐色	青-長石含む	内-口縁部ハケメ 外-ハケメ後ミガキ	反転
第22回	2	土師器	小豆台付甌	(7.2)	--	--	赤褐色	青-白色粒子含む	内-ヨコハケメ 外-ハラクズリ ハケメ、胎形摸	反転
第22回	3	土師器	台付甌	(15.6)	--	--	黄褐色	青-石英、長石若干含む	内-ナデ 外-ハケメ	反転
第22回	4	土師器	甌	(16.6)	--	--	赤褐色	青-長石若干含む	内-ヨコナデ、ハケメ 外-タテハナメ	反転
第22回	5	土師器	台付甌	--	--	--	赤褐色	青-白色粒子、石英、長石含む	内-外-ハケメ	反転
第22回	6	土師器	小豆台付甌(脚部)	--	--	4.0	黄褐色	青-石英、白色粒子含む	内-外-ハケメ	
第22回	7	土師器	台付甌	--	--	--	赤褐色	青-石英、長石含む	内-外-ハケメ	反転
第22回	8	土師器	台付甌	--	--	--	赤褐色	青-白色粒子含む	内-外-ハケメ	反転
第22回	9	土師器	甌	--	--	--	赤褐色	青-白色粒子若干含む	外-ハケメ	
第22回	10	土師器	甌	--	--	--	赤褐色	青-白色粒子若干含む	内-外-ミガキ	反転
第22回	11	土師器	高杯	--	--	--	赤褐色	青-白色粒子含む	内-外-ミガキ	
第22回	12	土師器	高杯	--	--	--	赤褐色	青-長石、石英、赤石粒子含む	外-ミガキ	反転

3号住

辨別No	No	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	調整	備考
				口径	器高	底径				
第22回	13	土師器	小型甌	14.8	(10.4)	--	暗茶褐色	やや粗-石英、長石含む	内-ヨコハケメ 外-ハケメ (摩耗している)	反転
第22回	14	土師器	甌	--	--	--	明赤褐色	青-石英、砂粒含む	内-ハケメ	反転
第22回	15	土師器	台付甌(脚部)	--	--	--	赤褐色	青-砂粒含む	外-ハケメ	反転
第22回	16	土師器	甌	--	--	--	赤褐色	青-白色粒子含む	内-外-ハケメ	
第22回	17	土師器	S字甌	--	--	--	赤褐色	青-黒色粒子、白色粒子含む	内-外-ハケメ	

第3表 土器観察表(2)

方形周溝墓

辨別番号	No.	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	調整	備考
				口径	器高	底径				
第23回	1	弥生土器	壺	-	-	-	黄褐色	密-白色粒子含む	外-繊維流次文にボン状粘附付	
第23回	2	弥生土器	壺	-	-	(5.8)	黄茶褐色	密-石英、長石、白色粒子含む	内-外-ミガキ	反転
第23回	3	土器器	壺台	9.2	-	-	赤褐色	微帶-赤色粒子若干含む	内-外-ヘラミガキ	
第23回	4	土器器	高杯	-	-	-	赤褐色	密-白茶紋子、赤色粒子若干含む	内-ミガキ、ハケメ	反転
第23回	5	土器器	壺台	-	-	-	赤褐色	密-白色粒子含む	内-ハケメ	反転
第23回	6	土器器	高杯	-	-	-	赤褐色	密-赤色粒子、白色粒子含む	内-ミガキ	後部穿孔
第23回	7	土器器	高杯(脚部)	-	-	(12.0)	明茶褐色	微帶-砂粒含む	外-ミガキ	反転、赤彩
第23回	8	土器器	高杯	-	-	-	赤褐色	密-石英、白色粒子含む	内-ハケメ	反転、赤彩
第23回	9	土器器	高杯	7.6	8.1	11.0	赤褐色	微帶-石英、砂粒多量含む	内-ハケメ	穿孔4ヶ所
第23回	10	土器器	壺	-	(16.6)	-	明茶褐色	密-石英若干含む	内-ヨコハケメ	
第23回	11	土器器	壺	-	13.0	-	赤茶褐色	密-石英若干含む	内-ヨコハケメ	反転
第23回	12	土器器	壺	-	8.8	-	茶褐色	密-石英含む	内-ミガキ	反転
第23回	13	土器器	壺	-	-	-	茶褐色	密-砂粒含む	内-ヨコハケメ	
第23回	14	土器器	折り返し口縁壺	(20.8)	-	-	茶褐色	密-石英、砂粒含む	内-外-ハケメ	反転
第23回	15	土器器	壺	-	-	9.4	茶褐色	密-石英、白色粒子含む	内-ハケメ	
第23回	16	土器器	小型鉢	-	-	-	赤褐色	密-石英、白色粒子含む	内-外-ハケメ	
第23回	17	土器器	台付壺	-	(14.4)	-	茶褐色	密-石英含む	内-外-ハケメ	反転
第23回	18	土器器	台付壺	-	-	-	明茶褐色	密-砂粒含む	内-外-ハケメ	
第23回	19	土器器	台付壺	-	-	-	暗茶褐色	密-砂粒含む	内-外-ハケメ	
第23回	20	土器器	台付壺	-	-	-	明茶褐色	密-白色粒子含む	ハケメ	
第23回	21	土器器	台付壺(脚部)	-	-	6.5	暗茶褐色	密-金雲母、砂粒含む	外-ハケメ	
第23回	22	土器器	台付壺(脚部)	-	(5.6)	6.0	茶褐色	密-白色粒子、砂粒含む	内-シホリメ	
第23回	23	土器器	小型台付壺	-	-	5.2	茶褐色	密-白色粒子若干含む	外-ハケメ	
第23回	24	土器器	壺	-	-	(5.8)	赤茶褐色	密-石英、白色粒子含む	内-外-ハケメ	反転

遺構外出上土器

辨別番号	No.	出土土地点	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	調整	時期
					口径	器高	底径				
第25回	1	C-IG	縄文土器	深鉢	-	-	-	赤茶褐色	密-金雲母多量含む	押型文	绳文
第25回	2	I-IG	縄文土器	深鉢	-	-	-	赤褐色	やや粗-石英含む		绳文中期 井戸原式期
第25回	3	H-10G	縄文土器	深鉢	-	-	-	暗茶褐色	やや粗-白色粒子 砂粒含む		绳文中期 井戸原式期
第25回	4	H-11G	縄文土器	深鉢	-	-	-	黄褐色	密-白色粒子含む		绳文中期 井戸原式期
第25回	5	A-2G	縄文土器	深鉢	-	-	-	暗茶褐色	密-白色粒子含む		绳文中期 井戸原式期
第25回	6	B-4G	縄文土器	深鉢	-	(19.0)	-	暗茶褐色	やや粗-石英多量含む		绳文中期 井戸原式期
第25回	7	J-2G	縄文土器	深鉢	-	-	-	茶褐色	やや粗-石英、長石含む		绳文中期 雪利
第25回	8	I-19G	縄文土器	深鉢	-	-	(5.8)	赤茶褐色	密-白色粒子多量含む	網代模	绳文中期 雪利
第25回	9	K-2G	土器器	壺	-	-	-	茶褐色	密-白色粒子含む	内-ミガキ 外-ハケ調整後 ミガキ	古墳前期
第25回	10	夷鉢	土器器	壺	-	-	(10.0)	茶褐色	密-白色粒子含む	外-ハケメ	古墳前期
第25回	11	夷鉢	土器器	壺	-	-	-	茶褐色	やや粗-白色粒子多量含む	内-外-ハケメ	古墳前期
第25回	12	K-2G	土器器	高杯	-	-	(6.8)	暗茶褐色	密-白色粒子若干合む	内-ミガキ	古墳前期
第25回	13	K-2G	土器器	台付壺	-	-	-	茶褐色	密-白色粒子含む	内-外-ハケメ	古墳前期
第25回	14	K-2G	土器器	台付壺	-	-	-	茶褐色	密-石英、長石含む	内-外-ハケメ	古墳前期
第25回	15	K-2G	土器器	高杯	-	-	-	赤茶褐色	密-白色粒子含む	内-外-ハケメ	古墳前期
第25回	16	K-2G	土器器	台付壺	-	-	-	黄褐色	密-白色粒子含む	内-外-ハケメ	古墳前期
第25回	17	A-1-G	土器	培洛	(28.0)	(4.0)	(26.0)	黄褐色	微密-砂粒多量含む	ロクロナフ	18世紀

第4表 土器観察表(3)

土坑・1堅・溝

探査No	No	出土地点	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	調査	時期
					巾桂	器高	底径				
第24回	1	2号土坑	土師器	台付壺	-	-	-	明茶褐色	密	外-ハケメ	古墳前期
第24回	2	2号土坑	土師器	台付壺	-	-	-	茶褐色	密	外-ハケメ	古墳前期
第24回	3	2号土坑	土師器	壺	-	-	-	茶褐色	密	内-外-ハケメ	古墳前期
第24回	4	3号土坑	陶器	碗	9.8	3.2	4.7	黄茶褐色	緻密	クロロ形	18世紀
第24回	5	5号土坑	土師器	台付壺	(15.0)	-	-	明茶褐色	密-白色粒子含む	内-ヨコハケメ 外-タテハケメ	削り出し高台
第24回	6	8号土坑	土師器	台付壺	-	-	-	黒褐色	密-砂粒含む	外-ハケメ	古墳前期
第24回	7	8号土坑	土師器	台付壺	-	-	-	茶褐色	密-石灰若干含む	外-ハケメ	古墳前期
第24回	8	8号土坑	土師器	台付壺	-	-	-	黒褐色	密-砂粒含む	外-ハケメ	古墳前期
第24回	9	8号土坑	土師器	台付壺	-	-	-	茶褐色	密-石灰含む	外-ハケメ	古墳前期
第24回	10	8号土坑	土師器	台付壺	-	-	-	茶褐色	密-石灰含む	外-ハケメ	古墳前期
第24回	11	25号土坑	土師器	S字壺	(10.4)	-	-	黄褐色	密-金無母若干含む	外-肩部ヨコハケメ タテハケメ	古墳前期
第24回	12	34号土坑	土師器	台付壺	-	-	-	茶褐色	密-白色粒子含む	外-ハケメ	古墳前期
第24回	13	1号窓塚	土師器	壺	-	-	(7.8)	茶褐色	密-石灰、吳石含む	内-ヨコハケメ	古墳前期
第24回	14	1号溝	土師器	台付壺	-	-	-	灰褐色	密-砂粒含む	外-ハケメ	古墳前期
第24回	15	1号溝	土師器	S字壺	(14.0)	-	-	茶褐色	密-白色粒子含む	内-ヨコハケメ	古墳前期
第24回	16	1号溝	土師器	台付壺	-	-	-	茶褐色	密-石灰若干含む	外-ハケメ	古墳前期
第24回	17	1号窓	土師器	台付壺	-	-	-	茶褐色	密-白色粒子含む	外-ハケメ	古墳前期
第24回	18	1号窓	土師器	台付壺	-	-	-	茶褐色	密-石灰、吳石含む	外-ハケメ	古墳前期
第24回	19	2号溝	土師器	台付壺	-	-	-	茶褐色	密-白色粒子含む	外-ハケメ	古墳前期
第24回	20	2号溝	須恵器	壺	-	-	-	灰青色	緻密	内-円状タクメ 外-タクメ	古墳

第5表 石器観察表

探査No	No	出土位置	器種	法量(cm)			重量	石質	形態	備考
				高さ	幅	厚さ				
第26回	1	L-17	石鏡	1.25	0.8	0.2	0.17	黒曜石	凹凸無葉	外-ハケメ
第26回	2	B区A26	石鏡	1.4	1.3	0.2	0.40	黒曜石	平基無茎	外-ハケメ
第26回	3	L-17	石鏡	1.5	1.0	0.3	0.30	黒曜石	凹凸無葉	外-ハケメ
第26回	4	B-65	石鏡	3.5	2.5	0.9	5.56	黒曜石	外-ハケメ	古墳前期
第26回	5	表採	石鏡	(3.5)	1.7	1.0	4.25	黒曜石	平基無葉	外-ハケメ
第26回	6	HR-8	石鏡	2.3	2.0	1.0	2.72	黒曜石	外-ハケメ	古墳前期
第26回	7	H-11G	石鏡	0.3	1.8	0.9	0.53	黒曜石	外-ハケメ	古墳前期
第26回	8	B-5	石鏡	1.8	1.2	0.5	0.67	チャート	外-ハケメ	古墳前期
第26回	9	B-5	石鏡	1.9	1.1	0.4	1.15	黒曜石	外-ハケメ	古墳前期
第26回	10	K-16	石鏡	1.5	1.0	0.3	0.46	黒曜石	外-ハケメ	古墳前期
第26回	11	K-23	石匙	9.5	4.9	0.8	52.13	粘板岩	横型	外-ハケメ
第26回	12	表採	石匙	4.8	5.4	1.2	16.78	泥穴	横型	外-ハケメ
第26回	13	L-21G	石匙	4.3	4.5	0.7	13.93	粘板岩	横型	外-ハケメ
第26回	14	L-18	石匙(研刀)	2.4	0.9	0.3	1.13	黒曜石	板状	外-ハケメ
第26回	15	6号土坑	楔形石器	3.0	1.8	1.3	7.35	黒曜石	外-ハケメ	古墳前期
第26回	16	5号住	擦顎	2.1	1.4	0.4	1.58	黒曜石	外-ハケメ	古墳前期
第26回	17	5号住	擦顎	2.2	2.4	0.65	4.16	チャート	外-ハケメ	古墳前期
第26回	18	A2G	擦顎	2.2	3.3	0.9	4.59	黒曜石	外-ハケメ	古墳前期
第27回	19	C-7G	打斧	(7.0)	4.8	2.0	83.94	粘板岩	短柄形	外-ハケメ
第27回	20	B-4G	打斧	7.8	4.0	2.1	87.21	ホルンフェルス	短柄形	外-ハケメ
第27回	21	K-23	打斧	9.5	3.9	1.0	63.60	ホルンフェルス	短柄形	外-ハケメ
第27回	22	表採	打斧	(5.5)	4.7	1.5	40.23	ホルンフェルス	短柄形	外-ハケメ
第27回	23	L-17	打斧	(7.4)	5.0	1.7	53.65	粘板岩	短柄形	外-ハケメ
第27回	24	表採	打斧	(3.2)	3.8	0.7	11.52	粘板岩	短柄形	外-ハケメ
第27回	25	表採	打斧	8.3	4.4	1.3	76.41	粘板岩	短柄形	外-ハケメ
第27回	26	1住	打斧	10.8	6.9	1.5	184.13	ホルンフェルス	分鋼形	外-ハケメ
第28回	27	表採	多孔石	8.7	6.8	2.0	176.92	安山岩	外-ハケメ	古墳中期
第28回	28	1住	敲石	9.4	7.5	4.8	54.00			
第28回	29	B-9	敲石	7.2	5.5	1.0	47.65			
第28回	30	A2G	土偶	4.3	1.5	2.7	18.26			
第28回	31	L-17G	土製円盤	4.8	4.9	1.5	35.77			
第28回	32	5住	土製円盤	4.2	4.3	1.5	32.25			
第28回	33	B-4G	鉗嘴車	3.6	3.7	1.5	41.31			
第28回	34	表採	占鉢	2.3	2.3	0.2	3.57			1枚

第V章 笛吹市北原遺跡出土の赤色物質の科学分析について

山梨県立博物館 哲名 貴彦

○はじめに

今回、笛吹市北原遺跡出土遺物に付着している赤色物質について、その材質の解明を主な目的として調査を実施した。

調査は、顕微鏡観察により表面の詳細観察を行った。元素分析は、蛍光X線分析と走査型電子顕微鏡+X線マイクロアナライザー(SEM-EDX)により行い、併せてX線回折を用いて鉱物としての調査を行った。

その調査結果について報告する。

○調査対象

- ・北原遺跡出土赤色物質

○調査方法

・顕微鏡観察

実体顕微鏡を用いて、詳細な観察を行った。

・蛍光X線分析

蛍光X線分析装置SEA5230HTW (SIIナノテクノロジー社製) を用いて、赤色物質の定性分析を行った。測定条件はRh管球で管電圧50kV、管電流 $28\mu A$ 、照射面積 $1.8mm^2$ 、測定環境は真空中である。

・走査型電子顕微鏡+X線マイクロアナライザー

走査型電子顕微鏡QUANTA600 (日本FEI社製) 、X線マイクロアナライザーGENESIS (アメテック社製) を用いて、赤色物質の観察と同時に元素のマッピング分析を行った。測定条件は、加速電圧30kV、測定環境は30Paである。

・X線回折

X線回折装置MiniFlex (リガク社製) を用いて、赤色物質の結晶構造調査を行い、ICDDにより鉱物の同定を行った。測定条件は、Cu管球で管電圧30kV、管電流15mAである。

○結果と考察

図1に、顕微鏡画像を示す。赤色物質が、砂粒表面に付着している状態が観察された。

蛍光X線分析で得たスペクトルデータを、図2に示す。スペクトルではFeが顕著に確認され、それ以外ではSi, Alが確認された。

SEM-EDXによる観察と分析結果を、図3に示す。SEMによる観察では、砂粒表面に粒子状の付着物が確認され、(a)2次電子像)、EDXのマッピング分析の結果、その付着部分からFeが強く確認できている((d)Fe)。

X線回折の結果、Quartzが非常に顕著に確認され、次にHematiteが確認された。

以上の結果から、赤色物質は石英などの細粒表面に、赤色物質としてベンガラが付着していると考えられた。ベンガラでは、鉄バクテリア由来とされるパイプ状ベンガラが遺跡出土の赤色物質として確認されることが知られているが、今回の赤色物質は顕微鏡SEMによる観察からパイプ状のものは確認されなかった。

今後、この物質が確認された遺跡の位置や遺構の特徴から、この物質が用いられた理由の解明が進むことを期待したい。

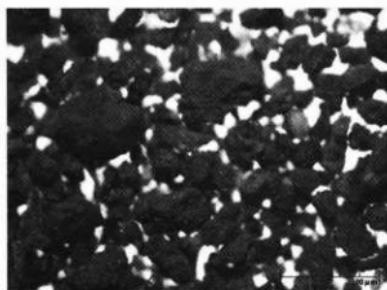


図 1. 赤色物質顕微鏡画像

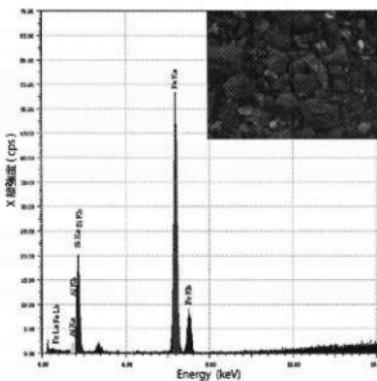
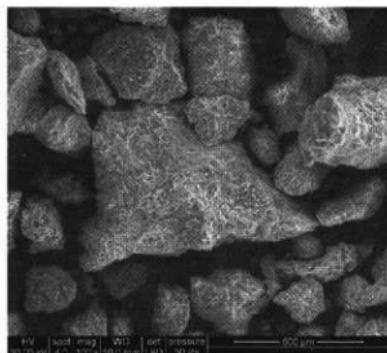


図 2. 赤色物質蛍光 X 線スペクトルデータ



(a) 2 次電子像

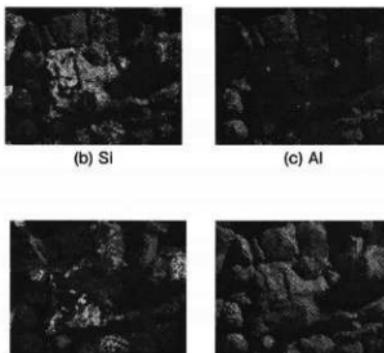


図 3.SEM-EDX データ

第VI章 確認された遺構と遺物

第1節 縄文時代

北原遺跡は南北を谷に挟まれた台地上に立地するが、北側の谷は比較的急傾斜を持ち、南側の谷は緩やかな傾斜を持つ。今回調査された位置は台地の北縁にあたり、谷に並行するように東西方向に調査区が設けられた。調査区内においても縄文時代中期の住居跡が確認されているが、調査区南側の台地上の畑から多くの縄文時代中期を中心とした土器片が表面採取できる。これらの土器片の多くは中期中葉の井戸尻式期のものや中期後半の曾利式期のものであり、北原遺跡の集落形成時期は概ね今回の調査において確認されたものと一致するとみてよいであろう。

一方で、調査区東西における土器片出土量や確認された遺構の状況をみてみると、この台地の東側では縄文時代の遺物、遺構の密度が極めて薄く、西側においては濃くなるという傾向がある。この遺跡と谷を挟んだ北東側には一の沢遺跡をはじめとする縄文時代中期を中心とした拠点集落遺跡が広がることを考慮すると台地東側で遺跡の密度が薄い点は興味深い。この点について日照や遺跡からの視野、採集の場としての山へのアプローチ等を踏まえて比較してみても、調査区東側と西側には大きな差はないように思える。今回の発掘調査は、台地肩部で狭い調査面積で行われた。台地上におけるすべてのデータを収集したとは言えないが、このような台地における縄文時代集落の土地利用、集落形成の計画性等については台地中央部で発掘調査が行われたら、研究課題とすべきであろう。また、今後の北原遺跡の調査例の増加を待った上で、一の沢遺跡などの大規模集落遺跡との関係についても考えていく必要があろう。

台地上での削平や土壤流失、自然災害による崩落等もあるが、各々の遺構について検証していく中では、台地北縁際まで住居跡が存在する点に着目したい。台地の肩部分は谷からの吹上の風も強く、立地的にはけっして好ましい位置ではないと思われる。台地西側の遺構密度が濃いといえ、ある時期に注目したならばそこに共存する住居の件数はそれほど多くはないであろう。しかしながら台地肩の部分で検出される住居跡の例は他の遺跡でもみられる例はあり、けっして珍しいものではない。そこには、集落内での地位関係や建物の利用形態の違いがある可能性も否定できないであろう。今後、調査機会を得たならば、台地中央部での住居における柱穴の太さや位置、炉の存在や使用状況等に着目した住居跡の構造比較も行う必要があろう。

第2節 弥生時代以降

笛吹塙川町の曾根丘陵沿いには弥生時代、古墳時代の遺跡が多くみられる。特に、本調査区の谷を挟んだ北東側の比較的標高の高い位置には京原遺跡、西原遺跡、金山遺跡などの遺跡がみられ、それぞれ方形周溝墓や住居跡などが検出されている。また、調査区南側に谷を挟んで広がる馬場遺跡や前付遺跡からも同様の遺構が確認されている。これらの遺跡において共通している点はその立地が台地上にあり、盆地側に対して比較的周囲の見通しが良いことなどがあげられよう。

一方で、この北原遺跡については、南北それぞれの谷の奥には台地や山が広がり、その見通しはけっして良好とはいえない。他の弥生時代、古墳時代前期遺跡とはやや趣を異にしているように感じる。

個々の遺構に関しては、調査区内で確認された遺構のみで言及するならば縄文時代中期遺構の広がりよりも遺跡としての範囲が東に広いといえよう。調査区東端においては弥生時代、古墳時代の遺構は縄文時代の遺構同様検出されてはいないが、調査区中央付近においては弥生時代後期から古墳時代初頭と思われる方形周溝墓が検出されている。ここで確認された方形周溝墓は南西部周溝のみで主体部は調査区外に広がる。この周溝部分は台地肩部にあり、残存状況は良好とは言い難いが赤彩された高杯の脚などの遺物を伴っている。

1号住居跡の土坑からはベンガラの原料と考えられる赤鉄鉱が出土している。赤鉄鉱の住居跡の土坑より出土した例は少なく、貴重である。

また1号住居跡は台地肩部まで比較的距離を持つ位置にあるが、他の住居跡は比較的台地肩部に近い立地にある。

縄文時代の住居跡同様、弥生時代後期、古墳時代前期の住居跡においても台地肩部に建てられている点は興味深い。今後、台地中心部での調査例を待って、比較検討していただきたい。



遺跡全景(南西側より)



A区全景(北西側より)



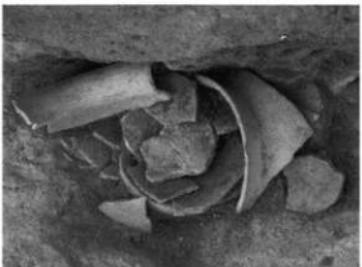
B区全景(西側より)



1号住居跡



1号住居跡赤鉄鉱出土状況



1号住居跡土坑1土器出土状況(上層)



2号住居跡



3号住居跡



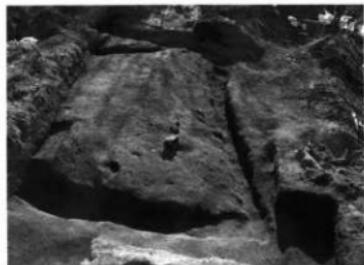
4号住居跡



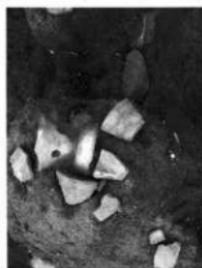
5・6号住居跡



方形周溝墓(南東側より)



方形周溝墓(北側より)



方形周溝墓高杯出土状況



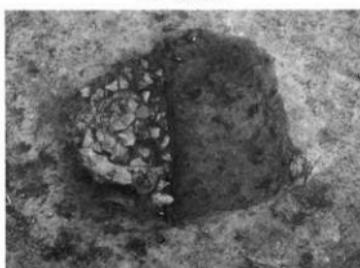
1・2・3・4号土坑(A区)



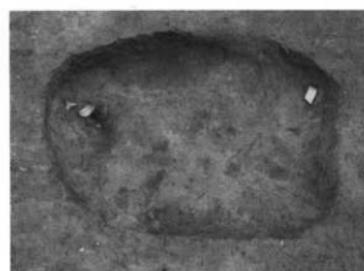
3号土坑(A区)



12号土坑(集石棲出状況)



13号土坑(土器敷き炉)半裁状況

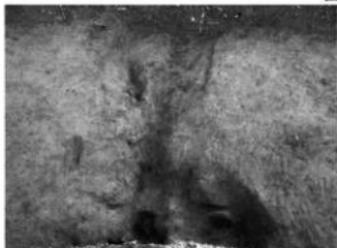


25号土坑

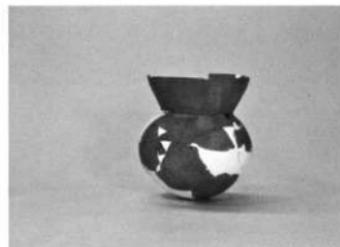


28・29・30号土坑、4号溝

图版4



1号住居跡土坑1出土土器



1号住居跡出土土器



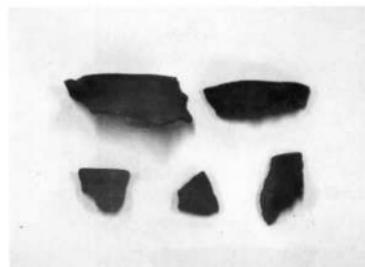
1号住居跡出土土器



1号住居跡出土赤鉄鉱



2号住居跡出土土器



3号住居跡出土土器



3号住居跡出土土器



5号住居跡出土土器



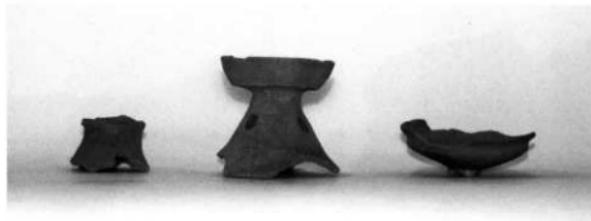
5号住居跡出土土器



6-7号住居跡出土土器



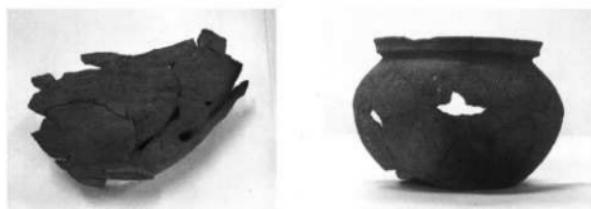
3号土坑出土土器



方形周溝墓出土土器



方形周溝墓出土土器



13号土坑出土土器



25号土坑出土土器



2号竪穴・4号溝出土土器



石鎌・石匙・石鋤・撮器



石斧



多孔石・敲石・磁石



土偶(右手)・土製円盤



紡錘車



古錢

報告書抄録

ふりがな	きたはらいせき
書名	北原遺跡（2次）
副書名	県営畠地帯総合整備事業守尾地区文線員道第7号工事に伴う
シリーズ名	笛吹市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第24集
編著者名	内田裕一 鷹野透朗
編集機関	笛吹市教育委員会
所在地	〒406-0031 山梨県笛吹市石和町市部 809-1 Tel 055 (261) 3342
発行年月日	2012年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		測地系		測査期間	測査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
きたはらいせき 北原遺跡	やまなしけんふえふきし 山梨県笛吹市 さかいがわちょうてらお 境川町守尾 ほか 30101外	251	127	35° 35° 19°	138° 36° 08°	2010.11.10 ～ 2011.1.14	1396m ²	農道整備
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
北原遺跡	集落跡 散布地	绳文時代中期 弥生時代後期 ～ 古墳時代前期	竪穴住居跡3軒 集石土坑1基 土坑8基 溝状遺構2条 竪穴状遺構1軒 竪穴住居跡4軒 方形周溝墓1基 土器歌炉1基 土坑26基 溝状遺構5条 竪穴状遺構1軒		土器・石器・土偶・陶器 土製品・古鏡・赤鉄鉢		1号住居より赤鉄鉢出土 弥生後期～古墳前期の方形周溝墓	

笛吹市文化財調査報告書 第24集
北原遺跡（2次）

県営畠畠地帯総合整備事業
寺尾地区支線農道第7号工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2012年3月26日 印刷

2012年3月30日 発行

発行者 〒406-0031

山梨県笛吹市石和町市部809-1

笛吹市教育委員会

印刷社 稲村印刷社

The Report of
Archaeological Research of KITAHARA site
(Secondary Survey)

Archaeological Survey Prior to the Construction
of the Branch Farm Road No.7 in Terao Area

March, 2012

Agricultural Department, Yamanashi Prefectural
Development office of Kyoto Area
Fuefuki City Board of Education